

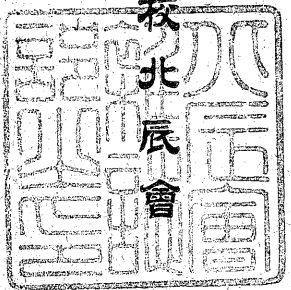
明治二十八年十二月三十日發行

(非賣品)

# 北辰會雜誌

第七號

第四高等學校 北辰會



北辰會雜誌第七號目次

論說

偽作文書研究の一例(承前)

浦井鏗一郎

実傳

成島柳北翁

金 風 樓

文苑

歌二首

草野 正義

全三首

香村 茂 富

全四首

河原 始 二

俳句數十句

秋虎 秋竹等

墓まうで

た、ま

山上村石窟記

蓉湖漁史 浦 井 信

詩五首

冷

金城客懷外二首

香 陽 北 村 澤

手結浦雜興 月見山

九十九洋漁長

雜 録

十日菊の記

自序 擔軍

與 桂 生

旅の記(ついき)

葛 の 屋

雜 報

玄冥回馭○天長節○望哭式外十數件

附 録

秋季陸上大運動會記事

北辰會雜誌第七號

論 說

偽作文書研究の一例 (承前)

教 授 浦 井 鏗 一 郎

前號に述べたる如く、彼得大帝の遺言狀は、其始めゲリヤアディ氏の與へたる全文と、レソユア氏の與へたる摘要との二文書によりて世に傳はりたるに、後更にソコルニツキ氏の文書發見せられたれば、都合三種の文書とはなりぬ、而して、余輩は前號の終に於て、此ソコルニツキ氏の文書こそ最も怪しきものなれといひき、されど、余輩は未だ該文書の眞偽に就きて、ある斷定を下すへき位置に立たざるなり、何となれば、よし今ソコルニツキ氏の文書を以て偽作なりと斷定すとも、猶他にゲリヤアディ、及びレソユアの二文書のあるありて、此二者に就きては未だ毫も余輩の確め得たる證據なきを以て何等の斷定をも降すと能はず、獨りソコルニツキの文書を以て偽作なりと主張するも、他の二者にして伏罪せざる以上は、遺言狀其者の眞偽如何を斷定せむとするに、何等の効果をも與へず、勞して功無き業なり、故に余輩は、ソコルニツキを窮追するを止め、他の方面より觀察を下し、而して後、三者を一纏めにして大打撃を與へ、短刀直入彼得帝の遺言狀其者の存否如何を斷定せむとす。

因て余輩は、新にゲリヤアディ、レソユア、ソコルニツキの三文書の間にある關係を有すること

なきやを研究せむとす、抑もギリヤアディ氏の文書は、千七百五十六年ナイト、オフ、エオンが魯國より持歸りたる遺言狀全文の寫にして、ソルニツキ氏の文書は、氏が在獄中に得たる聞書に過ぎざれば、此兩者の間に何等の關係もなきは當然の事にして、此兩者の全く別物なるべきは勿論なりとす、現にギリヤアディ氏自らも其書中に明記して曰く、余が此書中に於て公にせるエオンの持歸りたる文書は、遺言狀の全文にして、甚た價值ある者なれども、ソルニツキ氏の文書は單に聞書に過ぎざれば、甚た價值なきものなりと、氏の此言を爲すより察すれば、氏は必ず一千七百五十六年にエオンが魯國より持來りたる文書を閱せしと同時に、ソルニツキ氏の文書をも讀み、兩者を比較して、エオンの文書の價值あるを認め、即ち此文書を氏の著書中に引用したるなるべし、然るに甚た奇妙なる事は、巴理府圖書局(アルヒーブ)に於ては、今日猶ソルニツキ氏の文書を見るを得べきも、エオンの文書を見るを得ず、單にギリヤアディ氏の著書中に於てのみ見るを得べしといふ、同時にギリヤアディ氏の閱したる文書にして、其一是今日に存し、一は則ち無し、奇も亦甚し矣、因て余輩は、勢ギリヤアディ氏のインテグリチイを疑はざるを得ざるに至れり、氏は果して眞に所謂エオンの持歸りたるといふ遺言狀を讀みしや否や、氏か果して此文書を読みたりとすれば、此文書は、ギリヤアディ氏の時代までは無事に保存せられたれども、其後に至りて紛失したる者ならざるべからず、言を換ていはし、氏は勿論エオンの文書の存在を主張すべしと雖も、吾人は甘じて氏の證言を信用するを得るや否や、余輩もとより文書の存否其事のみを以て、文書の眞偽を断定せむとするにあらず、反之、多くの古文書は、ある時代ま

では保存せられしも、其後散佚の禍に罹りたる事を認めるものなり、今日現存せざる以上は、古の歴史家の引證したる古文書を信せずといふにあらざ、ランケ、トライナケ、ニール、モムゼン、クルチエヌを始めとして、正直にして信を語らむと勉むる、第一流の歴史家が、某年某月某日某所に於て某々の文書を見きといはし、其文書の今日に傳はれると否とにか、はらず、余輩は其言を信じて疑はざるなり、反之、其歴史家の人となり如何によりては、其言を信ぜざること往々これあり、因て今の必要は、ギリヤアディ氏の人となり如何を知らむことこれなり、彼果して何者ぞ、

ギリヤアディ氏が、ナイト、オフ、エオン傳を著はしたるは、彼の齡二十五の時なりき、彼は佛國屈指の小説家、アレキサンダア、ヂエーマア(Alexander Dumas)の門人なりしなり、蓋しヂエーマア氏は、多く活潑にして才氣ある少年を養ひ、其一半をして、巴理の市中は勿論、近郊を逍遙せしめ、殺人罪を始め、盜賊、火事、喧嘩、口論、痴情に關する奇話を探知せしめ、其一半をしては、公私の圖書館に出入し以て、廣く古今内外の奇事逸聞を蒐集せしめ、以て氏の小説の材料をして豊富ならしむるを常とせり、ギリヤアディ氏は、即ち其一人にして、氏は諸事に敏捷にして且つ文筆に達せるため、大にヂエーマア氏の愛顧を受けて、終に氏の秘書官となれるが如し、諸氏は前述の如く、一千八百三十六年、ナイト、オフ、エオン傳を著し大に世に行れたるが、後四十一年氏は之を再版に附し、非常に改正増補を爲したれば、其書名をも改めて、ナイト、オフ、エオン夫人傳とせり、而して兩者共に、彼得大帝の遺言狀を載せたるは前に述べたるが如し、

諺に曰く、頭隠して尻隠さずと、余輩はグリヤアデイ氏に於て此語の適切なるを見るなり、氏は第二版の序文に於て、其書の初版と大に異なる理由を述べて曰く、回顧すれば既に四十餘年の昔とはなりぬ、一千八百三十六年に於て、余が此書の初版を出版したる時は、余の齡正に二十有五、歳豊に氣豪なり、余の想像力は余を夢想の世界に駈り去り、余をして凡ゆる妄想を恣にせしめたり、實を言はば、余は勝手次第の事を書きたり、余が齡既六旬、往事を憶へば實に汗顔の至り、余は爰に天下に向ひて余の罪を鳴謝するものなり、余は自白す、エオンのナイト傳の一半は實事談にして一半は小説的なりと、猶明白にいへば、其一半は實事なれども、他の一半は余の虚構に關る、余は此自白を爲して罪を天下に謝すると共に、一言讀者に訴へざるを得ざる事あり、他なし、頃者シュオルダン某なる者あり、新にエオンのナイト傳を著せり、豈謀らむや彼は其過半を余の著書中より寫し取れり、讀者之を記せよ、今や余の齡六旬を過ぎ、思慮自ら定り、前に虚構の事實を公にして天下の讀者を欺きし罪を悔ゆること甚だ切なり、是に於て余は自ら前著の缺點を指摘して之を取消し、更に筆を執りて、此二版を著せり、此度は全く虚構の事實を削り去りて眞の實事譚のみを收めたり、因て書名をも改めて、エオン夫人の傳とはなしたるなり云々、此序文にて明なる如く、一千八百三十六年、グリヤアデイ氏が、ナイト、オフ、エオン傳を著すや、氏の明言せる如く、眞偽混合して甚だ價值なき著述なりしにもかゝはらず、名聲嘖々、天下に喧傳し、同書の賣行き夥しかりしかば、シュオルダンといへる人は、之を羨ましく思ふの餘り、氏も亦た同書を著述せるが、其際渠は充分の研究を爲さずして、専ら其材料をグリヤアデイ氏

の著より竊み取り、所謂グリヤアデイ氏の版權を侵害せしかば、グリヤアデイ氏は、之を不快に思ふあまり、自家の醜體を暴露するを厭はず、大にシュオルダン氏の著述を攻撃して顔色無らしむるに至れるなり、余輩は信ず、氏の此自白を讀たる世人は、實に一驚を興せしならむ、然らば即ち、グリヤアデイ氏の果して第一流の歴史家なるや否は、多辯を要せずして明なり矣、然り而して、彼得大帝の遺言狀は、グリヤアデイ氏の初版にも再版にも掲載しあるを見れば、余輩は此所に二個の疑問を提出せざるを得ず、即ち、前の一事により、グリヤアデイ氏の正直ならずして屢々虚言を吐くこと明了なれば、一度虚言せる者は再びすといふ、西洋の諺を守りて、第二版にも出たる、彼得大帝の遺言狀を以て氏の偽作に出づと斷言すべきや、或は、かくまでグリヤアデイ氏は前非を後悔して、第二版には一切虚構の事實を削り去りたりと明言する以上は、氏の言を信じて、彼得帝の遺言狀を眞正のものと思ふべきやの二問題なり、余輩は斷じて、第二版に出たる遺言狀を信ずる能はず、グリヤアデイ氏が、かほどまでに第二版の事實の虚構ならざるを保證する以上は、余輩は氏の名譽を重じ、第二版の事實の正確なるを認むべしと雖も、獨り彼得帝の遺言狀のみは、グリヤアデイ氏の辯明を以て満足せざるなり、其理由を述べむに、グリヤアデイ氏の著述が、全歐洲の大喝采を博し、氏の名聲嘖々たるを致したる所以の者は、主として、氏の著書中に彼得大帝の遺言狀を掲げたるためにして、此一編の文書は、實に氏の著述の腦髓とも稱すべきものとす、故に一朝此大切なる文書を抹殺し去らば、其と同時に、氏の著書の價值全く消滅し去りて、また一人の讀者をも得ざることを覺悟せざるべからず、况むや此一編の文書の

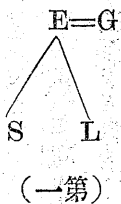


爲めに、氏の雷名全歐洲に轟きたることなれば、假令ひ此文書をしてグリヤアデイ氏の虚構に出でしむるとも、苟しくもグリヤアデイ氏たるものは、如何ほど前非を悔ゆるに切なるも、如何ほど己の良心に恥つるとも、其第二版に於て、此文書も矢張り余の虚構にかゝれり、と斷言するは、人情として(然り氏は大豪傑にあらざれば)忍びざる所なるべく、他は凡て削除と決するも、獨り此文書のみを存し置くは、最もあり得べき理にあらざや、故に余輩は、グリヤアデイ氏の證言にも拘はらず、彼得大帝の遺言狀を、其第二版に收めたるは、決して其虚構ならざるを證明する限にみならずと信す、蓋し、クリヤアデイ氏が、其初版に於て、彼得大帝の遺言狀を收めたるは、深き意味なく、單に世人の好奇心に訴へて喝采を得むとの考に過ぎざりしならむに、意外にも全歐洲の大問題となりければ、第二版の時には、最も大切なる文書となりて、終に氏は之を抹殺し去るの勇氣を失ひたるならむ。

前述の如く、彼得大帝遺言狀を世に傳へたる三文書、グリヤアデイ氏の全文(即ちエオンノ文書)と、レシユア氏の摘要と、ソホルニツキ氏の聞書との内、前後の二者は甚だ怪むべき形跡あるを認め得たり、豈獨りレシユア氏のみ安全なるを得むや、彼得大帝の遺言狀にして果して眞正なる者ならしめば、之を寫し又は抜萃したる以上三文書の酷似せるは勿論なれども、若し彼得大帝の遺言狀なるもの果して無しと假定し、三者各獨立に之を虚構したりとせば、三者の間に大なる相違あるべきは勿論なりとす、然るに實際に於ては、以上の三者は僅少の相違あるのみにて、其大意は申合せたる如く同一なり、然らば此三者は各獨立の者にみならずして、相互に關係あるこ

と明了なり、グリヤアデイ及び、ソホルニツキの文書共に偽作に出でしとすれば、レシユアの文書も亦虚構にして、氏はグリヤアデイを寫したるか、若くは、ソホルニツキを寫したるか、孰れにせよ前二者と同じく臭氣紛々たり、孰れが発頭人にして孰れが附隨者なる、孰れが主孰れが従、紛々擾々、嗚呼誰れか烏の雌雄を知らむ。

於是余輩は、前號に於て述たる、史料分析(ヒストリツシエ、アナリシゼ)の法を再び應用して、以て以上三者間の關係を論斷せむと欲す、先づ假に、グリヤアデイ氏の寫したりといふなる、エオンが魯國より持歸りたる遺言狀の存在を認めむ、然る時に次の三の場合あり、Eはエオン、Lはレシユア、Sはソホルニツキ、Gはグリヤアデイ氏にして、EとGとは同一なり、



第一の場合、グリヤアデイ氏の與へたる遺言狀の全文に就き、レシユア氏とソホルニツキ氏とが、共に其大意を抜萃せしものなり、次の場合は、グリヤアデイの文書をレシユアが抜萃し、そを又ソホルニツキが寫し取りたる場合なり、第三は、グリヤアデイの文書をソホルニツキが抜萃し、其を更にレシユア氏が寫せし時を示す、

以上の三の場合の内にて、孰れか正しかるべきかといふに、此問題を決せむためには、レシユアの文書とソホルニツキの文書とを、相對照比較して、其同不同の箇條を明にせざるべからず、そは甚だ煩しき業なれば、此には省略し、單に其結果のみを述ぶることすべし、之を要するに、ソホルニツキの文書とレシユアの文書とは、其用

句も語法も、殆んど全く同一にして、間々二三文字の相違せるあるのみ、而して其相違ある場所に於ては、常にレシユアの方、語法に叶ひ頗る明文なるに、ソユルニツキの方は、屢々文法上の誤謬もあり、決して最上の佛蘭西文といふ能はず、然らば則ち、二者の關係多言を要せずして明白なるべし、

(未完)

## 史傳

## 成島柳北翁

金 風 樓

昇平二百年。忽焉として浦賀急を告るや。天下の人心鼎の如くに沸き。四方の浮浪は亂麻の如くに起り。内治外交交々として行路の難きを嘆す。此に於てか幕府斷然舊來の面目を一新して破格の任用をなし。頗る人才を登用す。此を以て身を微賤に起して高位高官を辱うし。班を重臣の間に列する者多く。中に就て成島大隅守の如き。其最著しき者の一にして。實に勝安房守、栗本安藝守等と伯仲の間に在り。而して勝、栗本往々にして世人の口頭に嘖々たりと雖も。獨り大隅守に至りては。世人之を謂ふもの鮮なく。僅かに聲譽の一端を詩人騷客の間に留むるのみ。これ抑も何の故ぞや。他なし彼進んでは説用おられず。退いては專慧才を韜藏して一身を風月に托し。時に狷介の性質は彼を驅りて。罵詈諷刺口を極めて時弊を矯め上官を譏らしめ。氣節万丈大に當世の面目をひくに足る者ありしと雖も。彼亦洒々落落底の人。胸中濶として城壁の設あるなく。豪傑を氣

取りて自ら重うすると海舟の如きに似ず。此を以て交道極めて廣く。交はる所臺閣江湖を撰はず。文士相忌み相輕んする間に立ちて。彼れ必らずしも撰ふ所あらず。衆人に接する極めて圓滑を裝ふを以て。人その心事を察せず。既往の事歴を忘却し。遂に平々凡々詩酒聲妓に耽りて一生を苟くもする者となす者多き所以也。此れ豈彼か爲に嘆惜せざる可けんや。苟くも事に操觚に従ふ者。彼か心事を世人に紹介せずして可ならむや。これ余か淺劣を顧みず。杜撰を憚らず柳北翁の稿ある所以。其傳記の梗概を誌して柳北プロバの真相を躍然たらしめんと欲する者。若夫精や緻や。去りて蠹魚本箱の間に訪へ。以下柳北翁と言ふべき所を翁云、煩を避くる所以也

徳川八代將軍吉宗公有臨院殿の時。名にし負ふ奥儒鳴鳳卿なる者あり。代々碩學を以て嘖々の名天下に汎ねかりき。傳て四世の孫司直に至りて。奥儒を以て圖書頭に任せられ。養子良讓桓之助と稱し。稼堂と號す。亦家學を繼きて奥儒となり圖書頭に任す。父子交々命を奉して徳川實記前後編并せて八百餘卷を編纂し。名亦當世に聞えぬ。累世の家風業已に如此の時。桓之助と其妻成島氏との間に。一兒の天保丁酉二月甲子を以て呱呱の聲を擧ぐる者あり。是を後には成島大隅守とて昂論以て廟堂に諄ひ。柳北又は濕上子とて永く文人騷客の間にもて嘯されし希世の才子なりけり。誕生日に因みて甲子太郎と名つけし。後名を改めて弘と言ひ保民と字し。府下柳原の北に家するを以て柳北と號し。後に以て稱となす。濕上子は其別號也。之を信夫燦先生撰ふ所の墓銘に徵するに曰く。

先生幼而穎悟。長有器識。好學能詩文。年甫十八嗣家爲侍講。云々

これを以てこれを顧るに。其年少にして既に大に文學藝術に通せしや知るべく。若かも齡僅かに十八歳にして。拔んでられて將軍の侍講となると云ふに至りては。豈に尋常一様の才ならむや。雖然其の此をして此處に到らしめし所以の者。徒に翁か天資の穎悟と器識の活達なるとのみには歸す可らざる也。蓋し之か因由の本尊たる者他にあるありて存す。何をか因由の本尊と云ふ。曰く。祖先以來儒に於て嘖々たるの家風と。其れに従ふに身邊の境遇家庭の教育は。眞然として自ら常人と其歸を特にすと謂ふと是也。此を以て翁をして假令天資明敏思想活達ならさらしむるも。爾かく四面の境遇等は。翁をして尋常一様の少年として終らしむるとを肯んせざる也。況んや先天的彼が天資の明敏なるに於てをや。是に於て翁は四面の境遇と豊富の天才とに煽動せられ。寢食を忘れて日夜讀書に耽りぬ。若夫針小棒大轉々涅造に巧なる支那に生れしめんか。車胤祖瑩と并ひ稱せられて。聖小兒とも持囃やされしならむか。そは兎もあれ角もあれ。翁か後年手記する所の睡窩の記を誦讀せば。如何に四面の境遇等は翁を促して。勉強せしめしかを知るに足りなん。蓋し曰く。

濕上子少き時睡を喜はす。夜闌にして猶燈を挑けて讀書し。東方少しく白ければ忽ち起きて灑掃す。夏日と雖も敢て一朧の午睡せさりき。云々

其勉むる尋常ならざる概此類也。此を以て瞬く間に學業大に進み。その始めて十八歳の時已に左の吟あり。天才驚くに堪へたり。

甲寅九月念七日シツツ殿下講武于駒場原弘亦扈從賦短古一篇

健士幾隊躍騶驪。綵袍如花簇林丘。前騎電奔後騎叫。蹴破枯篠響颼々。駒原秋深霜氣苦。野鶉驚散亂似雨。將軍臂出鷹坊鷹。鼓啄張目睨天宇。素纒千尺迸勁氣。歎兮一搏群翼空。奔電投下彩幢畔。百僚拍手奏凱同。將軍蒐獵非遊戲。昇平講武有深意。治不忘亂古攸箴。况今海警勞廟議。噫嘻麾下億萬徒。請奮其力若虎羆。鷹也精悍克適用。可人而不如鳥乎。

三溪曰。綵袍句當時景况寫出如畫。余亦嘗有知是駒原獵歸客。燕衫染出滿身花句。今知此景况者僅々屈指也。

又曰。結繳以經語收筆。全首皆振。

歲晚書懷

天妖地孽耳頻驚。驚裡匆匆歲月征。春意綠絲晴柳影。曉寒裂帛斷鴻聲。嗜書每笑身同蠹。提劍元期勢截鯨。十八年間成底事。自嘲碌々齷齪生。

晴暉曰。君未二十年滿。奇才驚人。敬服々々

是豈非常の勉強と滿腔の奇才とは。翁を驅りて絢爛媚香又活潑の辭をして。紙面に溢れしむる者に非る無きを得ん哉。宜矣翁の將軍家定公諡名溫恭院の侍講に拔てらるゝと。而かも未幾許祖考修むる所の實記訂正の命を被ふるに至りては。轉々一驚を興せざるを得ず。其事成るに及んでや。功を以て黄金時服を賜ふ。思ふに翁年少と雖も。若かも家學を繼ぐに於て遺憾なかりしならむ。是より翁文學を以て幕府にある者大凡十年。此間に於て一大紛紜は幕府に醸成し。翁か羽翼を伸はして青雲に翔るの端緒を排きぬ。

先于是。三代將軍家光公の時に當りて。外國船の入港を禁し。命を諸侯に下して曰。黒船を見掛  
け候は。二念なく打拂ふ可しと。有名なる寛永打拂合は即是也。然るに寛政年間に到りて。白  
河樂翁侯の議に依り。來意を尋ね漂流船ならば。食料を供へ退去せしむ可し。若其差圖に従はざ  
れば打拂ふ可し。と改めたるを。女政年間に至りて。又々「二念なく打拂ふ可し」の舊に復して。  
大に對外の氣象を疆固にせしを。弘化元年に至りて。おどましや荷蘭國王の德憑に由り。又々寛  
政の令に改め。大に廟謨に對外軟の氣風を吹込みし折柄。嘉永五年彼留理の入浦となり。幕府の  
周章一方ならず。上は朝廷の干涉を許さず。下は諸侯の嘴を政治に容る可からずと。古來の型  
典を忽ち破壊し。匂々京師に奏問して朝廷干涉の基を開き。水戸侯の進退を輕忽にして之を激せ  
しめ。剩へ諸侯へ下問して大難を彌縫せんとするに至り。諸侯は得たり賢しと。是迄閣老の外  
溜詰の諸侯は勿論。諸祇侯の諸侯と雖も。嘴を政治に入るを得ざりしを。今は自由氣儘に論難  
是非し。他日佐幕討幕など言ふ。黨派の分離軋轢の端緒を開き。之に次きては安政の獄烈侯の  
幽居となり。志士は斃れ無頼は横行し。遂に發して櫻田御門の逆血沙汰となり。續て生麥の變と  
なり。歸りて蛤御門の亂となり。下りて赤間關辨償の恥辱となる。此間彼れ柳北翁屢將軍の御前  
に在りて昂論激説。時に或は龍の雲を呼び。虎の風に嘯かか如き者ありしと雖も。目に星のある  
人は何れの世にも稀なる者にて。一として用ひられざりければ。年少氣銳若かも大才の能天下を  
料理鹽梅するに足るの彼れ。いかてか慷慨悲憤に堪えんや。遂には痛飲縱遊以て抑塞の氣を泄ら  
し。翁は花柳社會に往來す  
る實に端を此に發せり其不平歎む能はざるに及んてや。往々にして筆墨を藉りて當世を諷しぬ。

嘗て狂詩を賦して

權臣評議臭於屁。大府威光輕似塵。

の句あり。要路の人此句を見て憤恚已ます。如斯の暴狂書生。安んそ官途にあるを得んやと。忽  
ち其職を免して五十日の謹慎を命す。翁これより門を閉して英學を攻むると三年。技大に進み頗  
萬國の史乘に精はし。當時句あり。

一脱朝衣臥草廬。俸多未要學樵漁。天公賜我閑如許。須讀平生欲讀書。

句々卓落として霸氣を帶ふ。知る可し尋常一様の儒生にあらざるを。噫尺蠖の屈するは伸張せん  
と欲する所以。今の草庵に蟄居して蠹魚を學ぶの所。何ぞ知らん他日天下を経綸するの大才の隠る  
ゝ所ならんとは。子弟知らず。其蠻語を修むるを噴りて盡背去り。甚しきに至りては。暗殺以て國  
に殉せんとする者あるに到る。若かも彼恬然として顧みず。一心不亂に勉強す。既にして慶應元  
年秋。幕府大に改革する所あり。翁を起して歩兵頭と爲し。幾許もなくして騎兵頭に轉す。時に  
齡僅に二十有九。嗟翁やもと文墨の間に生長し。尙且武を習ひ兵を用ゆるの術に達せし者乎。誰  
か其穎悟と務むるの尋常ならざるに驚かざらん哉。豈に講武の餘暇。竊かに人目を盗みて經子を  
學びし藤樹先生の類乎。古の所謂武備ある者は文事あり。文事ある者は武備ありと言ふ者。翁に  
於てか見る。翁此に於て當路に建言して曰。須らく兵制を二變せんか。宜しく洋式に則る可しと。  
幕府之に従ひ。翁をして佛蘭西兵法傳習の事を督せしむ。因て新たに兵營を横濱野毛山に築き。  
大に諸隊を練す。此に至りて騎兵奉行に進み。從五位下大隅守に任し。祿二千石を賜ふ。實に



異常の拔擢と言はざる可からず。凡そ奥儒と云ひ圖書頭と云ふ。其位階秩祿余之を審らかにせずと雖も。而かも一般に儒者の當時に於けるの位地は。實に醫師繪師と伴を同する者にして。能く貴邊に往來するを得ると雖も。其位階の卑きは實に豫想の外なりし。然らば則ち柳北翁一家と雖も。必らずや高位高官ならざりしならん。然るを一躍して奉行となり。大隅守に任せられ。二千石の大身となる。國家廟謨の定なき時とは言へ。豈に夫れ冗事ならんや。若し翁が説く所用をいめんか。若くは節を折りて明治政府に仕へんか。まさに大に驥足をのばし。聲譽尊崇亦勝。栗本の比には非ざりしならん。之を始にして四代將軍の新井白石あり。之を後にしては十二代將軍の林大學頭あり。之に次きて翁の十三代十四代に歴任するあり。并びに當時輕蔑を極めし御儒者より起りて。大政外交の要路難衝に中たる。之を幕府の三大儒と稱するも。余は其過稱に非るを言ふ。雖然翁か左支右吾遂に志を得る能はざりしが故に。益翁をして尤物とならしめたり。柳北プロパーの真相は此に至りて益光彩を發するを見る。亦必らずしも嘆惜すべからざる也。

斯くて翁は時運の變に際會し筆を擲て戎軒に従ふ者凡三年。幕政夷靡百事振はす。翁志の行ふ可からざるを知り。表を上りて職を辭す。居ると暫らく。再擧けられて外國奉行に拜す。此時に當りて幕府急難相踵き。府庫欠乏して殆んど策の出つる所を知らず。俄かに又た拔んで、會計總裁或曰副總裁となし。大久保一翁と相提携して。錢穀の事を管せしめ。班參政に列す。向きには翁の説一として用ゐられざりしと雖も。今や幕府の彼を待つ所以の者厚且重。翁いかてか奮勵一番せざる可けんや。此に於てか一翁は當時内務を兼ねるを以て。海陸の軍費其他會計の事務は。專彼か

辨給する所なりし。嗟翁や身を文墨の間に起し。中頃にして兵を用ひ。轉して外國の事務に執筆し。遂に又紛々收む可からざるの財政を整理す。慧才盈々器識満々の人に非ざるよりは。安んぞ能く此の如くならむや。蓋し幕府の事急なるに及んでや。便ち翁に待つ所以の者を見は。翁が器量と才能とは。大に當路の重きを置きし所たるを知るに足らん。

既にして慶喜公の罪を朝廷に得給ふや。將に上野寛永寺に謹慎せられんとす。依りて閻老以下を召し。親しく其議を下す。諸僚皆唯々敢て争ふ者なし。獨翁や肯んせずして曰。東臺に屏居する萬々不可也。宜しく單騎京に入りて其罪を謝し給ふ可し。臣等二三の僂徒跳以て隨はん。是政宗磔柱を荷ふて罪を謝するの策也。若夫然らんか。八州の人心必らず動搖するとなからん。幕府大に聲譽を墮すに及はすして天下又安からむ。臣國家の爲めに謀るに。策これより是なるは無しと。之を争ふて深更に到る。慶喜公聞かずして東臺に奔る。翁便ち病と稱して骸骨を乞ふ。幕府可かず。病を勉めて事を視せしむ。既にして官軍品川驛に進むや。幕府服部綾雄、堀鏡之助、鵜殿團次郎等を使はして。將軍のために宥免せんとを乞ふ。官軍の先鋒聞かず大喝して曰。慶喜大逆首謀の罪免るす可からずと。三使恐惶頭を抱いて歸へり報ず。慶喜公時に東臺にあり。左右を召して之を議す。或は曰。事茲に至る亦如何ともすべからず。宜しく將軍自ら罪を負ふて。社稷の爲めに引決すべしと。衆之に同する者多し。翁此に於て奮然として叫んで曰。滿堂の諸君は是皆將軍家の浩恩を戴く者に非ずや。然るを今や急難に際し。君を殺して自ら免れんとす。諸君或は之をなさん。我れ大隅に於ては何ぞ爲すに忍びんやと。辭色頗烈げし。時に榎本和泉、原退藏等之

に和し。前の引決を言ふ者頗羞色あり。嗟三寸の胸中能く百難を排して百姓を按んし。霸府を安らかならしめんとするの大策を韜藏し。而して不遇用ゐられず。顧みれば幕府崩壞僅かに一朽木に支へられ。衆心離反すると天地の如く。斷乎として動く可きに動き。動く可からざるに動かざるの儕なきを思はれ。豈に無量の感慨は彼れ柳北翁の胸中に澎湃たらしむや。是に於てか秋夜の吟と成りて顯はれぬ。

雲吞月處小星明。天末秋風雁一聲。半夜愁人眠不得。敗蕉窓下對殘檠。

嗟小星明とは何。雁一聲とは何。磬溪曰。句句天然。自是絕句上乘と。良齋曰。清峭と。余詩韻に精しからず。其清峭と天然とを知らずと雖も。抑も又説く所や悄凄。隱逸の間に愁人の愁を陳する所。豈に憐れむに堪へずとせんや。而かも翁か意氣は此の如きの故を以て挫折する者には非ず。悄凄の極は霸氣を激して愈益勃々たらしめ。時に扼腕飲泣天の一方を睥睨せしむ。此に於てか中秋風雨の吟あり。

風伯噉雲師。奪吾今夜月。吾將駕氣球。直到金蟾窟。

廟堂の風色日々慘憺。吾志亦行ふ可からざるを知り。飄然冠を掛けて農に歸す。時に明治元年九月齡僅に三十二。嗟惜哉。若夫彼をして尙農に歸せず。依然廟堂にありて重きをなし。遂に公武の間に周旋の勞を取らしめんか。正史彼か功を載せて。勝諸公と名を後世に輝々たらしめん。雖然説行はれずして猥りに戸位を占むるは。彼の取らざる所。寧民間に下りし所以の者は。余輩をして柳北プロバの真相を窺ふに便ならしめぬ。當時詩あり左に録す。

公選一眠心暫閑。恍疑身在狃鼯間。醒來聽斷前檐雨。坐見冷雲歸暮山。

嗟這般の胸裡感をも如何。冷雲の一句何そ夫れ胸裡を畫くの愁凄なるや。當時翁の志を知る者は。只冷雲のみなりしならむ。否今に至るも知る者頗少小ならんや。嗟悲哉。雖然翁の平ならざる者は廟堂の官吏に在り。將軍家に於ては亦何かあらんや。蓋し翁や君に仕へて誠懇能諫の忠臣たり。交絶つては惡聲を出さるるの君子也。此を以て翁か職を退くの後と雖も。終始主家と思ふの情は自ら詩韻の間に顯はれぬ。左に一句を録す。

北窓高枕誦陶詩。大馬長槍彼一時。病客身邊秋到早。醒人宅裡月來遲。少年憾慨老應悔。浮世交情窮始知。忘却從前榮辱事。琴書消日不圍棋。

此を以て明治三年左院出仕に徵せられしも。辭して就かず。依然として窮廬を守りぬ。翁此に至りて其節を全うすと言ふ可き也。

夫翁か半生大に雄翔すへきの姿を以て。遂に不遇世に容れられざりし所以の者。説去り説來りて概如此。此に於てか不遇を嘆するの餘は不平となり。不平極まりて便ち世俗を罵詈諷刺するの文字となる。蓋し人情已むを得ざる所なる可し。左に當時の一吟を録す。

山月彈琴圖

城裡豈無山。車馬厭喧喧。城裏豈無月。清輝沒紅埃。白雲萬里中山。姐娥有情夜口來。雲爲衾。桐月爲妻。隱士生涯亦快哉。好合宛窀房中樂。老桐一張橫蒼苔。仙指拂絃清商進。峭崿草木震欲摧。子期死後世無耳。誰解和樂中食哀。鏗爾彈歇山寂寞。猛虎一聲々如雷。



子期の一言實に能く一世を罵倒し盡くすと言ひつ可し。

此時に當りて。偶深草本願寺内に訓蒙學舎なる者創まる。翁乃ち聘に應じて舎長となり。念を政界に絶ちて専ら年少子弟を薰陶す。明治五年壬申法王大谷光尊歐米漫遊の行あり。隨行を命せらる。翁喜んで之に従ふ。此行や實に彼をして一新智識を得せしめ。一層人物の品位を高めぬ。凡そ朝且暮夜向ふ所は。舊山河に非ず。舊人物に非ず。或は荒墟に佇廻し。或は盛都に雄大に驚く。爾來胸中に鬱勃たりし不平の心は。行くに隨ふて洗濯せられ。恰も塵外夢中に超然たる者の如く。汗漫飄忽の客には。見る物として快ならざるは無く。聞く物として吟囊を叩かざるは無く。加之記臆達者にして。能く西籍史乘に通ずるの故を以て。愈益豊富の詩想を躍然たらしめぬ。翁の西航日乘風に世に行はるれば。余は歲月の詳。事實の精に就ては贊せざるべし。只其行路の梗槩を記して便已みなん。

壬申九月程に上るや。先づ寓樓の壁に題して曰。

右望巴黎府中月。左瞻龍動埠頭雲。快哉萬里風濤上。要作人間得意文。

見るべし翁が行心矢の如く。未だ其地を履むに及ばずして。既に巴黎龍動の風貌は。髣髴として胸裡に畫かれ。滿々腦裡に澎湃せる詩想は。既に錦囊を破ぶりて片脚を出だしつゝあるを。嗟快哉快哉。人生の快事是より始まる。頓て纜を横灣に緝き。愈乗り出す清風萬里の海。船岸を離れて見る。人は螻蟻の如く。一瞬を苟くもすれば。故國の山河既に業に空し。漂茫一望艾蕪なく。一髮青山看不看。半輪明月大於船。船中拱手見るに物なく。なすに事なし。鯨波を蹴破ぶりて西

上の天物を觀覽せんとするの心は。矢竹の如しと雖も。茫々たる海洋。日は海より出て、海に没し。何時果つべしとも思はれざれば。さすがの翁も今は家郷の事のみ思ひ出てられつ。

艫外鷄鳴燭影殘。蠻奴捧水白陶盤。無端驚覺家山夢。撼枕濤聲客膽寒。』

故園日夜望濃不。濃自出家多客愁。誰識風濤湖滌夕。夢飛三逕菊花秋。』

既にして一抹の雲山は。右舷にあたりて顯はれ出てぬ。萬里の霸客感多少をや。由りて歌きて曰。

唯見漁舟數葉翻。茫茫無際水乾坤。按圖海客呼吾聲。一抹雲山是廈門。

船香港に達す。句あり。

枕水樓臺萬點燈。郵船估舶喚相譬。海南九月猶炎熱。爭買銀盤幾片水。』

層々鉅閣競繁華。百貨如邱人語譁。此際誰束賣秋色。幽蘭冷菊幾盆花。』

香港の景物到れり盡せり。船岸をはなれて安南洋中に浮ぶ。船中句あり亦誦すべし。

一鳥不翔雲水間。驚瀾吞吐碧孱顏。離家萬里安南海。無復風光似故山。』

寒昆を過ぎて新嘉坡に至る。奇異の風光發して便ち絶句となる。

南邊麻陸北蘇門。地勢蜿蜒兩嶂奔。奔到洋中不相接。雙頭對處萬帆翻。

嘉坡萬景一筆に鍾まる。妙言ふべき無し。之より印度洋を横きりて。赤道炎燄の所を過ぎり。遠く楞伽山を雲水模糊の間に認め。十月望夜船亞丁に泊す。水光湛々として明月天に在り。豈二句

の詞なかる可けんや。

斷崖百丈海門開。大月晚從洋底來。萬里壯遊探絕勝。愧吾獨少老坡才。

紅海を過ぎりては蒙西の古を忍び。蘇士を航しては神鳥の功よりも偉なるに嘆し。ポルト、サイ  
ト港を通して地中海に入り。シ、リ、海峽を過ぎりて雲山を指顧の間に認め。是より伊太利の西  
海岸に從ふてエルバ島に到り。英雄の末路を哀れみて。感慨俯仰去るに忍びず。乃ち詩韻を手向  
けて曰。

想君歸鮫伴漁郎。末路菴潛亦此鄉。夕日影沈雲陣遠。雙岩相對丘蒼洋。  
兵威打破泰西天。屈指茫茫七十年。島嶼空存當日景。英雄成敗付雲煙。

何ぞ辭を用ゆる沈痛にして森嚴なるや。船マルセイユに達す。是より船を棄て陸行巴黎に到れば。  
士女燦爛として花の如く。碧樓畫閣薨を弁べ。夜光の杯。葡萄の酒。噂々の聲。切々の吟。何れ  
か目を眩し耳を驚かさざる。日夜街頭に漂ふて四方を覽し。目に入る者耳に聞ゆる者。乃ち發し  
て二十八字となる。其句輕妙絢爛。讀者をして身已に巴里の大都にあるの思あらしむ。斯くて月  
日は漸う重なり。六花繽紛滿街の皓雪水晶を欺くの時。セイヌ河畔に元旦を迎へぬ。思ふに  
今や翁が魂魄は。盛麗の巴里大都にはあらで。灑上の草庵にありしならん。嗟去年の今頃は。一  
家團樂して屠蘇の酒を酌交はせしと。嗟東都の子女。今は陽々小春の空に。駒下駄をやならしつ  
らむ。門松は如何に。注連は如何に。あらゆる觀念は胸中に起り。發して又々廿八字とはなりぬ。

草廬猶在墨江濱。何事閑身去若雲。萬里清音河上舍。無端逢着舊東君。

客裡新正趣更奇。蠻奴相對不相知。一瓶傾盡三鞭酒。唱出東京好竹枝。

或は暗香浮動月黃昏の頃ほひ。セイヌ河上に立ちて來往の士女を評じ。或は春風萬斛の香を送る

られて花賣の乙女に恍惚し。或は奈翁一世の廟に詣りて七絶を手向け。或はモルサシ宮に抵り  
サシ、セルマンに登り。或は奈翁三世の末路を憐みて七字を弄するなど。茲に早くも三句の月日  
を閲しつ。三月十六日を以て巴里を發し。瀛笛一聲一抹の煤烟を見棄て。鐵車伊太利に向ふ。有  
名なるモンセニイ三哩の隧道を過り。ミランを経てヴェニスに抵り。アペニン連山を攀りてフロ  
レンスに出て。遂に羅馬の舊帝都に達しぬ。四圍荒涼亦舊日の盛に似ざると見て。慨嘆已ます。  
風意吹春舊帝都。獨憐臺閣委烟蕪。干戈畢竟爲誰用。石柱空留百戰圖。

或はシイザアの遺宮を過りて。敗瓦殘磚の僅かに尋ねへきに悲しみ。或はボンヘイの遺趾を尋ね  
て。今昔の感に勝へず。或はセント、ピイター大寺に詣りて「法王冠履皆金玉。不賑門前凍餓人」  
と唱ひ。此に大凡一句を費やし。再び去りて巴里に赴き。鐵路北海に行で。英海峽を渡り。有名  
の大都龍動に達す。詩あり實境見るが如し。

瀛車煙接瀛船烟。四望冥々不見天。忽地長風來一掃。倫敦橋上夕陽妍。

頂上晴雷脚底烟。一車入地一車天。中間吾亦車中客。驀過東西陌與阡。

或は歩をウエリントンの墓畔に曲げ。或は英王離宮ウキンピル、カッスルの壯嚴幽邃に驚き。茲  
に數句を費やして西太平洋を横きり。ポストンに着し組育に入り。杖をセントラル、バアクに曳  
き。ナイヤガラの大瀑布を觀。スコットの古戰場を吊ひ。幽許もなくして。鐵路ロッキオ山を横  
きり。グリオシ、リオバを渡り。メルト、レイキ畔に出て。チバダ山を横きりて西桑港に達す。

鐵路大凡三千三百哩。延犬の長路頃刻にして。太平洋より太平洋岸に出つ。翁が胸中今や故國の

山河唯太平一帯の水の隔つるのみなるを思はれ。豈に望郷の念は勃々たらさらむや。  
西來桑港似歸家。忘却家山萬里遐。蒼靄、薰風、好天氣。園々開遍杜鵑花。

是より太平洋を航し。思ふところは舊山河のみ。舊妻子のみ。舊知友のみ。歌ふ所の者亦一とし  
て懷郷の辭に非るは無き也

啼禽催我不如歸。夢繞家山情更痴。海、船、日、馳、三、百、里。客、心、猶、覺、太、遲、々。』  
鎮海濃雲黯不開。濕霖時節我歸來。想池、澤、上、舊、茅、宇。幾、顆、金、丸、標、有、梅。』

船横灣に達す。金蟾皎々灣頭に掛り。故園の黃菊まさに盛也。年を閱する大凡一歳。其發するや月明  
に於てし。其歸るや亦月明に於てす。奇なる哉。家を出てより緯度に平行して地球を一周し。

多くは眼を盛麗の都邑に晒らし。大陸的風物に感染す。宛然新來の歐洲紳士なりしなる可し。然り  
と雖も翁や官位もなく厚祿もなく。視んと欲する所の者を視。聞かんと欲する所の者を聞く。必ら  
すしも爲めにする所あるに非ず。况んや揚々美髯を撫して洋行の縉紳と氣取るか如きに於てをや。

歸り來りて亦溼土の一閑人。其愉其快自ら官遊の人と其撰を特にす。宜なり翁の口吟する所や。  
無爵無田且莫憂。天公縱我自由遊。人間快樂汝知否。雙脚踏來全地球。』

休送新霜上鬢頭。風、蒿、瑟瑟、故園秋。米、蘭、名、妓、巴、黎、酒。豪、興、呼、誰、話、昨、遊。』  
翁か閑散燕居するの時。時に或は靜思默考して昔遊を思ひ。巴里會食の光景を探くり。ロツキイ

山間の風貌を想起し。人知れず案を叩いて快と叫ぶもの。夫れ幾回をや。嗟羨殺々々。超えて明  
治七年遂に筆を携へて朝野新聞に入る。柳北プロバの真相是に於て始めて顯はる。(編出)

文苑

和歌

草野 正義

山時雨 秋山はしくれそしきる瓢もみちもみちかりするとききたららし  
歳 暮 もの學ふまとのをさゝのふしのまに今年も早く暮にけるかな

香村 茂富

伊企灘 皇國の手振しらきのたふれらと尻むけてこそいひはなちけれ  
冬 懷 舊 いたしへを忍ぶ心のつもりつゝ雪ならぬ身も消えかへる哉  
歳暮述懷 人の子の道もえどけぬわか身こそ年のくれゝ悲しかりけれ

河原 始二

冬 夜 むかしより三つの餘りに數へたる冬の夜すから書を讀まなむ  
冬 月 冬の夜の寒さを影にあつめつゝ雲井たかくもさゆるつきかけ  
冬 人 事 訪はれぬもなか／＼うれし冬の日はふみよむ人の實なりけり  
歳 暮 分け入りて書のはやしに遊ぶ身は年の暮さへのどけかりけり

發句

小狐の振返りく行く枯野哉 秋虎 五十三驛はつ霜を消す茶の煙 樂園  
 銀杏散て嵯峨野に道を迷ひ鳥 拜殿に落葉ふきこむゆふべ哉  
 一村は小川抱えて大根引 詩仙堂庭せまけれど冬木立  
 神無月しぐれてもどる夕かな 猪のかけはしわたるまも夜哉  
 鳴千鳥淡路の島に灯の見ゆる 采遊 金屏に灯もゆるふゆぼたん 尺骨  
 冬がれて鎮守の杜の入りかかな 無字庵 寒菊や吾糟糠の妻やめり  
 大根ひき鳥羽の方や夕月夜 ゆふ雲や鷹のそれたる雜木山  
 熊笹の中に霜おく小いしかな 鐘樓や枯木數本のふゆの雨  
 霰ふる狩屋に征矢を磨きけり 吐虹 藪陰やあられたばしる馬の鞍 秋竹  
 木枯の馬の尾をふく堤かな そのなかに時雨亭あり散紅葉  
 炭がまを狸飛ぶとき月さむし 寺町や右もひだりも冬木立  
 故ありてしばしは許せ黒頭巾 貧に居て家内五人の火燵哉  
 夕時雨なゝめにどほる榿木町 豆男 運動會の競技を觀て  
 木枯しの三尺の庭ふきあるゝ 小藪から鳥のかけ出す野分哉 鳥溪  
 炭かまの煙うすらぎくぬ 緑門の傍に人形の立番せるを見て  
 茶の花や大川見えて寺見えて 物言へば人を咎めん鳥をどし

句合

小立野は鳥井一つのさむさ哉 豆男 順禮の抱き合ふたる枯野かな 豆  
 小立野や鳥井の見ゆる冬の川 尺骨 ことがらしや拳を握る子順禮 尺

墓まふで

野田の山里秋ふけて 思はじものと思へども  
 ながめさびしき夕まぐれ 招く尾花の姿にも  
 入相つぐる鐘の音に つれよぶ鳥の鳴音にも  
 散るや紅葉の二つ三つ ありし昔の忍ばれて  
 おもひ起せば我姉は 涙にくるゝ秋のくれ  
 十とせ二とせその昔 いざ吊はむ姉が墓

櫻花さく朝ぼらけ

櫻花さく朝ぼらけ いざ吊はむ姉が墓  
 花諸るどもに散り失せぬ 山の細道こえゆけば  
 花もろ共に散りうせし 峯の木枯音さえて  
 玉の顔月のまゆ 道のかたへに打そよぐ  
 慕ふもあだま思はじな 尾花が袖もうち枯れつ

咲き残りたる女郎花  
みにまむ風に花や散る

をつる滴はなみだかゝる

思へば胸のせまりきて

やう／＼心とり直し

よべと答もなき姉の

黄菊白菊手向けつゝ

あつくき近くはせよれば

南無阿彌陀佛あみだ佛

千草にすだく虫の音に

とふらひ終りながむれば

いとゝ哀のいや増して

日は早や西に落入りて

嘆みかなしみ打伏せば

またも打出す山寺の

松風さへもむせびつゝ

寂滅爲樂の鐘の音に

浮雲ちりて月白し

山上村石窟記

蓉湖漁史 浦井 信

江州滋賀郡。固富故蹟。長等逢坂之山。以至紫姬蟬叟之址。世人傳稱者。不一而足。而高穴穗宮最舊。實係千七百年前故蹟。然此數者無一物之存。徒傳其名耳。若夫太古遺址儼存者。山上村石窟是也。山上村在琵琶湖之西。鶴濱之北。即舊史所謂山前也。弘文陵在焉。丘陵蜿蜒。有不動祠。祠北數町。有一窟面東。口窄小。屈身而入。廣方三間許。高稱之。四側疊石爲壁。大石蓋之。一

隅缺損。日光透射。下則雨水瀉焉。其傍舊有二窟。今並崩壞。失其所云。祠南一町。又有一窟。其狀粗似。但稍狹小。此地背山面湖。可以迎朝日。構窟於此宜矣。蓋石窟之設。在數千年前。視之。前數者真孫曾耳。按近江風土記曰。當太古之世。有大柞樹。幹圍五百尋。朝隱丹波。夕蔽伊勢。湖東三郡。不能見日光云。可以知湖西之地。亦屬榛莽也。棲此窟者。土蜘蛛之屬歟。國栖耳垂之族歟。被髮文身。草衣跣足。其狀況果如何。今則陸設鐵軌。水走輪船。漚笛響。煤烟颺矣。俯仰今古。不得不驚嘆也。近時講究穴居之事者。爲匪少。而此窟未顯于世。予有好古之癖。而無鑒識。故聊記所見。以俟人類學家其人之說。

野行所見

冷 骨

寂々人烟絶 凄々秋氣深 千山搖落候 萬里客遊心 野菊經霜爛 陰蛩犯晝吟 行々古林下 枝上叫寒禽

粟津途上

斜陽秋草露花新 處々燈光明滅頻 老馬獨衝輕霧去 蒼茫天地一詩人

那谷寺探勝

村盡青山田 林深白塔微 翠松將暮雨 紅葉半斜暉 金磬清而警 珍禽舞更飛 眼中遊勝女 看做廣寒妃

書窓暮咏

文苑







國に來りて、其各般の真情を捉ふる事、とても一二年の短日月間に能くし得べきことに非ざるを信じ、徒らに誇張の言をなして郷人を喜ばしむることは爲さざりき、  
頃日郷友より告げ來りて曰ふ、外遊の客が第一に要するものは完全なる觀察力なり、而して觀察力を精密確實にする習慣を養はんが爲には、日々見聞することを筆に上すに如くものなし、請ふ君が其地にありて眼に映じ耳に觸るゝ所のもの、其大要を記録して之を我北辰會誌に寄せよ、由て以て大に君を利し、兼て會員を益するを得ん、事の肉心的、無形的に亘らざるは固より厭ふところにあらずと、

然れども思へ目今我邦人に朝鮮の事を言ふは、所謂十日に菊を談ずると一般なるべく、昨歲春三月、朝鮮の國名すら知らずして、花林鬼戯に餘念なかりし無邪氣の小童も、今ははや學校の歸り途、仔細らしく京城、大同江を語り合ふに至れる世なるを知らずや、

さはれ、思へば世はさまざま也、園の菊の重陽を過ぎたりとて、空しく無情の霜に奪はしむることなき、葉には化粧せしめて天プラとなし、瓣には珍しき温泉に浴せしめて砂糖漬となし、而して一夕の膳酌に立たしむる粹客も多き世なりけり、さなりさなり、友の勤めもかゝることを的にしてのことならん、余は竟に友の言に同しぬ、十日菊の記の成らんとする謂れまづ斯の如し然れども、もとは是れ不文者が旅窓寒燈に對しての走り書、脩辭の新聞文的に流麗ならん筈なく、事柄の地理書的に秩序あらん筈なし、特に未だ遍く各地を歴遊せるに非れば、記する所主として一局部の事に止るべきは豫め讀者の首肯を求め置かざるべからず、我が實見せざる事に關しては、

必ず其實地に事を經驗せし人の言と、書類の中にて領事の報告のみとを取りて參考とし、所謂齊東野人の言と虚暴無實の書とは斷じて余の眼中におかざるを誓ふ

明治二十八年秋  
開國五百一年

擔 軍

朝鮮に遊ぶ  
日 本 人

與 桂 生 識

何人も晝間朝鮮の開港場に上陸せば、先づ簪を結び、鬚髻を蓄へ、風采堂々たる丈高き白衣の壯漢が、異様の負具を脊おひてノソノソとやり來り、客人の荷物を運ばんことを乞ふを見ん、其負具は自然の樹又二本を並べ之を組合せて作りたるもの、繩を用わずして安全に荷物を載することを得、土語之を呼でチキ(擔字を當つ)といひ、チキを脊負ふ者をチキサラム(擔人)といひ、而して數百のチキサラム、之をチキン(擔軍)と概稱す、

西洋人が「ニンソク」を以て吾邦下等社會の代表言となすか如く、余は擔軍を以て朝鮮の下等社會を代表せしめ、其生活の如何に單純に、其精神の如何に凡劣なるかを説き、以て讀者に此國下等社會の有様を想像せしめんと欲す、

倉に米穀の貯なく、家に商工の定職なく、朝にチキを負ふて出で夕にチキを負て歸り、其間唯荷運びの多からんことをのみ希ふ彼等には、開港場が眞に此世の樂園にして、而して又開港場の花は實にこの擔軍なり、

丁稚が買物に出づ、買ふ所のもの重ければ則ち擔人を呼びて之を運ばしむ、下婢が贈物を携へて他家に使す、其贈物重ければ則ち擔人に命して之を脊負はしむ、轉宅人の荷運び、肴屋の魚運び、

大工の木運びより、茶人が庭園用の砂運びに至るまで、一として彼等が勞を待たざるはなし、若し夫れ貿易商館の番頭が、四五十の擔軍を率ゐて、山の如き貨物を埠頭より倉庫に移すの壯觀に至りては、特に茲に記するを要せざるべし。

斯の如く開港場に於て一日も欠くべからざる擔軍は、其体格の魁偉なると共に頗力量に富む、何時ぞや我軍隊が内地行軍をなし、折、日本の軍夫が二人して重々しげに荷ひ行く彈藥箱を、擔軍は一人にて脊負ひ而も平氣な顔にて歩むを見受けたり、以て其一斑を推測するに足らんか、

其容貌は士君子の風あり、其力量は人を兼ね、直に眺むれば誠に天下の好國民なり、然りと雖彼等の呑氣なる、殆人間以下の生活をなして恬然たり、半日仕事に有付かずとするも更に憂ふる所なく、街側に躊躇して悠々烟草を吸ひ、やがて眠氣を催せば其儘チキを枕にして華胥の里に遊ぶ、犬に颯がるゝも小供に戯れらるゝも毫も顧みざるなり、醒むれば又ブラ／＼然として仕事を拾ふ、口腹の空しきに及べば、得たる賃錢の一部を以て、別に其同輩の男女が市衢の人通り多き處に出で來て賣れる餅の二三片を買ひ之を食ふ、若し得たる錢なき時は、家毎の前に並べある塵溜をあさりて、魚の骨、澤庵の切屑などをまやぶり、而して二三合の水を呑みて一食を濟ますを例とす、昨日も然り今日も然り、年々歳々實に斯の如し、其生活の簡易なる、到底見ぬ人の信じ得るところにあらざるなり、

然れども彼等亦人間なり、隣邦を組織せる公民なり、邦人の之を使ふ少くとも主従の禮を以てせざるべからざるに、實際を見れば彼等が牛馬の如く器械の如くスレーヴの如くに役せらるゝを如何せん、余始めて此地に來り邦人の擔軍を使役する狀を見しときは思はず一滴の涙を濺きたりき、先づ四五人以上のものを雇ひて六七丁を距つる地に往復運荷せしむるものとせよ、雇主は彼等の類に思ひ／＼の印しを墨黒々と書き、一往復毎に一書づゝを添へ與ふ、以て逃亡と怠慢とを防ぐといふも、是豈に人間が人間を使ふ道ならんや、而して歩行の遲鈍なるものあらば、棒と鞭とは條ち其腰邊に飛び來る、是を以て彼等は從順に、荷の重きを厭はず往復の滋きを嫌はず、營々としてこれ力む、かくて務を終りて賃錢を乞へば、半日の勞力に酬ゆるに僅に韓錢二十文（わが四錢）……

虐待は尙之に止らざるなり、終日奔走して竟に仕事を不得ず、身は如何に簡易なる生活にも甘ずべしとするも、家には病父と幼兒との餓に苦むあり、一念の萌す所禁ずるに難く、遂に店頭に一握の米を竊むに至らば、—— 惡し、行は固より惡し、惡しと雖多寡の知れし米の一二合ならずや、—— 瞬く間に店僕三五群れ來りて、引き据へ、颯飛ばし、打ち懲らせし末、其一天張りの着物を寸断々々にしてやりて尙厭き足らず、果ては之を縛して淺海に投ずるに至りては、余また天を仰いで言ふところを知らざるなり、

頃る、邦人の或る社會が、躍起となりて頗に朝鮮の改革に熱中するも其功の顯れざるもの、思へは以なきにあらざるなり、

（擔軍終り）

旅の記 (ついで)

葛の屋

山代の温泉に向ふ道のり二里あり、まむごう寺とやらむいふ寺にて中食す、恰も亭午なり。北寺を出で少しく歩むほどにうしろより一人の翁く、あとになり先きになり進むにいつしか物いひかはしぬ。翁云ふおのれ山代に湯治中今日は女をつれて那谷見物に出かけ今歸るなり、女の足のおそきよを堪え難くて獨り先たちぬ、早くまかりて腹ふくらせぬばなど問はぬとまでつぶやきつ、又おのれらが金澤より來れる由云へるを聞きておのれも金澤なり山代にはなほ金澤の客あまたあり、何町のたれかし何町のくれかしらも滞在せりと、金澤の人と云へば誰しも知り合ひと思へる如く話す口ぶりのをかしければ私に笑へりしが、翁さきほどよりをりく南無阿彌陀佛くと念ず。さては此人も例の信心家なめりと思ふに、御身等は御坊様ならずやと翁の云ひ出でたる、あまりのどに聞きちがひならむと問ひ返へすに、また坊様ならずやと問へるなり。お坊様お坊様此武骨なる書生をお坊様とは翁もよほど奇人なるかな、おのれらさなりと答へなばなほさまくのをかしきともありたらめと、誤魔化しは至て不得手の方なれば正直にあらざと答へて興さぬ。山代に着き翁と分る、町のまなかに高く大なる家あり、共同の湯場ならむ、そと側に柿賣る店ならぶ溢柿ならぬさまなれと買はず、之を圍みて宿屋あり、一周がして一時過ぎ大聖寺に急ぐ山の中に行かす。さてもかの翁はなにておのれらをお坊様とは云へりしやとおのれいぶかれは、丁眼子手もて頸をうち、これ見よ君も僕もかり立ての頭にめづらしき帽子を目深かに戴けば先づ頭より身なりより御坊様と見れば見えぬともなけむと云ふ、うべ常ならば一月も二月もからぬ頭

の髪を旅と思へはさすかにて云ひ合はさぬと互に短くかりたれば帽子の下のみ見て坊主頭とや思ひけむ、笑止くと興し合ふ。それより一里半の間山あり川あり、川は大聖寺川ならむ山の名は知らす、此川何日あふれけむ、堤をくづしたる跡其儘の荒地となり、一面の石原一とせ二とせのうちにもどのさまに復るへうもあらず見ゆ。洪水のおそろしき兼ねて聞く所なれども、今日のおたり此のさまを見てそいろあはれに覺えたれば

大水の跡うらめしき案山子かな

名も知らぬ峠に登りてふり返り見れば野の面ひろくとひろく雲か霞かおぼろなるかぎりは遠き山の尾に連りて山の上に又山あり、明日よりも一きは白く見ゆるは問はでも白山ならでやは

白山と名つけしこゝろわれ知りぬ白き山ゆゑしか名つけしと

二時過ぎ大聖寺に着く、ゆくて急げは町の見物をもなさでひたぶるに篠原へ走る大聖寺より篠原まで一里半の道のりは歩みしにあらで走りしなり。篠原には宿るべき家居なれば動橋まで戻らではと聞けば足もそらに急ぐ、高尾村、小鹽辻村など何れも山路なれども砂丘にて道よく開けたり、一二里の遠きまで砂丘かどかたぶきしも進むにつれて濤の音一步くと近う聞え篠原につく

\* \* \* \* \*

手塚敵の首を郎等に持たせて木曾の前に持て行申けるは光盛曲者の頸取つて候名乗れと申せば存する旨あり名乗るまじ木曾殿は御覽じ知るべしと計りにて名乗らす侍かど見れば錦の直垂を服たり大將軍かと思へば續者なし京都西國の者かどすれば阪東聲なりき若き者かと思へ

ば面の皺七十餘に疊めり老者かどすれば髮鬚黒うして盛りと見ゆ何者の首なるらむと申す木曾打案じて哀れ武藏の齋藤別當にやあらむ但し其は一年少目に見しか白髮の糟尾に生たりしかは今は殊外に白髮になりぬらむに髮鬚の黒きは何やらむ面の老様はさもやと覺ゆ實に不審なり樋口は古同僚見知りたるらむとて召されたり髻を取り引仰けて一目打見てはらゝと泣きあな無慙や實盛にて候ひけりと申す

\* \* \* \* \*

墓と云へば墓なり、一つらに生ひ繁れる松林の此處のみ廣く切り開きたる真中に土丘あり、松の老木一もと枝長く垂れて之を蔽ひ木の根に近く小さき墓石立てり、臺石二つに割れ墓石も右に傾けり風なくて松の聲は静なれども濤の音は絶えず響きぬ  
墓石に彫む文字の數々、表に

萬松院殿覺翁禪門

南無阿彌陀佛

壽永二年五月廿一日此處に

左りの側に

戰死應永二十一年三月遊行十四代太空中人實盛公の幽魂を化導

裏にまはりて

し給ふ處なり往還の諸人隨喜の願を發し菩提の爲めに念佛し玉へ

また右の側に

極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂

臺石にも

六道の苦患を救ふ此の六字唱てくれよ承る人々

見るもの聞くもの何れか哀れを催さる、あはれ實盛公の幽魂今いつと

墓の上の千とせの松も枯れ初めぬなき魂今はいづこなるらむ

往きしと思へばむびし袖の露

枝かはす松さへ瘦せていとしく淋しさそふる濤の音かな

涙を拂ひて見廻せば

夕日影さして淋しさいや増さる古き戰の笹原の里

悲風濤聲を吹き、夕陽松影を長うす、日々月々今に七百十二年

なほ昔を忍ぶ手塚山、髪洗池など此わたりにあめれと傳ふるものは名のみ、山を墾りて畑となり池を埋めて田となしぬれば、備はる人の心まかせ何れをそれと知るよしもなし、とまめだちて云

ふ賤の女の言葉はうそか實か白波の音のみ聞えて海を見す、五時近くに松林を通りぬけ柴山瀨の東岸に出でぬ。をりから六日の月影淡く山の端にかゝり夕風そよ／＼と吹きて孤帆遠きあたり

たゞよへり、明月を見、水涯を歩む、水に月、月に水、此の連想はあのれをしてそゝろ三湖臺の景を想はしめぬ。いでや三湖臺上明月に嘯臥せむはいかに、それよけむ稀有の事まど心合ふ友垣



の一議なく同してあなちもしるや〜と勇み進む。片山津の温泉場にて日また暮れ月影あかくてりかかやけり。

三つの湖見ゆるうてなに今宵しもねむと思ひて我急き行く。

山路なれども嶮しからず、こゝも一里半にて動橋の橋詰に出つ、角家にて蒸芋を求む、晝飯は粟津より二里計りの處にて食ひそれより六里あまりをわけていそぎたれば腹はいとうへりぬ。片山津にて蒸芋を求めたれと見當らざりしに、今得たれば餓虎の餌をあさるも愚か飛びたつ思ひして歩みなから暫しのうちに三つ四つ食ひたり、初めのほどはいかにも旨かりしもまだ腹ふくれぬに口の内の唾液乏しうなりて喉につまりけるこそ是非なけれ。仰きて松の木間より月影を望めばうたて何時しか朧ろにかすみぬ、雲蔽へばこそ月も尊とけれとは何人かいひけむ。

今更らに何かたのまむ朧月の光の隈なくこそ。

さばれ朧月夜に如くものもなしと咏みけむ古人もあれば時こそかはれ、なか〜またをかきふしもあらむとなくさめて進む。進むうちにも三湖臺の景色はたえず己れが心に浮びぬ、何れ今度のたびにば目のあたりをそめてむと思へば詳しくは人にも聞かず、獨り心にさま〜と思ひ構へつるなり。水は三湖に満てり、山は之に臨めり、高きにゐてこを瞰むなれば其形勢の勇ましげなるべきは疑ひなからむ、明月之を照してあるは明鏡の如く、あるは金波千里の觀あらむ、霜冷かにして霧は山の麓を罩め淡く濃く朧ろに彩るさまはまた一しほならむ。さるを無心の雲やう〜にひろまりて朧月の影さへ消え失せぬ。有情のちのれ等手に持ちし珠を奪はれたらむ心地なせと

思ひ立ちたるとなきでは止まぬ男氣に月なくもつぷやきて急く。若し三湖臺を行き過ぎてはならじと遇ふ人毎に問ふ、何れも呆れ顔とは暗ければ分らぬと驚き聲に答ふるもをかし。かくて今江村に着く、氏神の祭りにや軒端に大なる提灯をつるせり。町はづれにて今少し行きて右手なる小徑を登れる處と聞きて勇みて登る、登れば何處も同じ作地なり、ひかで名高き名所が斯る作地なるべきぞ、こは恐らく誤りならむと四方に求むれども他に山らしきもの見えず。さては三湖臺とはかゝる殺風景の處かと驚きつ、茶畑に憩ふ、頼みにかけて月影なければ薄暗かりに景色を像るのみ、丁眼子は水見ゆかしこにもありと云へとおのれには見え分かつ、月なき夜色は三湖臺もあなじく暗黒なりけり。小楯とすへき木も床とすへき草もなければ茶株に腰かけ、途にて得たる大根と薯と交る〜、食ふ、薯もあきたり、大根もうまくなし、談も盡きたり、睡たくなれりふと小松の天に煙火の擧るを見れども疲勞れたる身には興を添へず、遂に己れは奥座を着笠を被り、丁眼子は谷羽を着幅傘をして眠る。途すがら吹きたる風も今は止みて暖かなり、山下の祭りの太鼓も音たえて萬籟寂かにいさゝかも耳に感するものなし。約すらく此の空のもやう受合ひ難し、若し雨降らば直ちに降りて夜行せむと、睡りぬ。覺むれば風漸く寒し、更に一睡りして覺むれば益寒く殆んど堪え難し、雨も一滴二滴降り初めぬ、暗さも増して眞のやみとなりぬ。いでまからむ、早曉の景色惜しからぬにあらぬと雨中にふるひつゝ、野宿はものずきのほどをや超しぬらむとて下る、民家の雨戸もる火かけに時計を見れば十時廿分なり、山上に止まりしも僅か三時間あまりなりけり。毛布も携へず、外套も被らず、野宿せむ用意少しもなく野宿を企てたる不法雨の折

りあしく降りたりと云ふも、あるは却て折りよく降りたりと云ふへからむ。始めのほどは身震ひしつゝ歩めるが、歩むうちに稍温うなりぬ、小松の長き町を過ぎし頃は雨いたく降りて歩むに物うく、ちのつと無言にて進む。町を過くれば松並來り、松並送れば村落迎ふ、睡足らぬは睡氣頻りに襲ひ來り、眼は特更らに開けどもよくは見えずして直ちにふさかむとし、足は勤めて動かせども歩み遅くして處を定めず。暫し路傍に憩はましく思へど雨を防がむすべなし、今更らに困しつゝ寺井村をも過ぎぬ次の村に着けば今は一步も進まず、ぬむたき眼をすりて休むべき處を求む、左手の軒端にあかりしてまだ寝もやらぬ家あり、貧しき農家のうから同胞五つたり夜を徹して働けるなりけり。暫し休ませてよと他事なく頼みつるを如何に哀れに聞きたりけむ、睡きはつらきものぞ、休み玉へされと休まする處なし、と翁餘儀なく言ふ。うべ狭き家の内は曳き白、藁など充ちて家の者さへ居所なきさまなり、ちのれ等固より軒下にてこと足れば蓆一枚かりて其を敷き踞して睡る。九尺の間口、三尺の入口、家の内にてこける藁を軒下の六尺ある所に積めるなり、ちのれ等並びて此藁に凭り忽ち睡入りたるが、こは何時にしてそれよりいくとき睡りたるや知らず、唯現つに翁が己れ等を越して藁を積みけると、蹄音高く小馬のあまた引かれ行きけるとを覺ゆるのみ。かくて翁が今は邪魔なり、最早やよろしからむと起せるに目覺めしは三時なりけり、厚く禮述べて出てたつ。軒端の寒さは山の上に劣らぬば一二町かほどは前の如く身を震はせて進む。小馬の少なきは三つ四つ多きは拾の數をこしたるを前と後とに入付きて逐ひ來るに度々遇ひぬ、さるほどに睡りまだ足らぬにや足もと又やうく躊躇きて、あるは田に陥らむとし或は木の根に

躓のき、溝に驚き砂石に止まり、遂に河風寒き手取川に着きぬ。番小屋を窺へば洋燈の影まばゆく照りてうちには番人蒲團温かけに熟睡せり、羨ましく眺めて橋にかゝれば一昨日の事想ひ起されて夢の中に夢見る心地して過く。白山風し颯と吹き吳産醜す旅衣、河霧寒く身に迫り水音遠く間に響きぬ、なほ一里も進めば何處にやまだ暗きに鶏の鳴くもうれしく、雨中ながら夜明けの氣色は爽かにほの／＼白み初むれば明るも早く六時には松任のとある社の傍へなる茶亭に腰かけたり。睡氣既に覺めたれば運ぶ朝食を待ち兼ねて食ひたる、蒸芋とは又格別の美味なりけり、三里たどり／＼して十時に香林坊にて丁眼子と分る。僅か三日の旅も歸り來れば門邊の菊の花色も香もいやましてわれを迎ふる如くなり

附記、ことし夏京都に遊びたる歸るさまた粟津の法師に宿る、鳳凰樓にはあらず石川丈山が圖南と書きたるをかゝげたる部屋なりけり、をりにつけ圖南の二字も面白う感じぬ。

あけの朝隣室なりし那視學某と伴ひたればにせよ、家婦どもをして一二町かほど見送らせ影失するまで望ませしはこそ反して豪氣なりし。今江村に近づき計らず眞の三湖臺に登る、作地にあらず、登りて見るべき爲めにわざとものしたる小山の頂なり、木葉今の景色にあらざりき、かくては昨年の秋の夜登りて徘徊ひたりしは何處なりけむ、今記すだにちもなしや

(完)



雜報

玄冥回馭

玄冥寒を戒めてより凄々たる寒日簷を経て短かく、凜々たる寒風窓を穿て冷し。寒山瘦せて寒柯枯れ寒林疎にして寒鳥凍る。何ぞ怪まむ寒水骨を生じ寒地膚を裂くを。玉龍相戦ふて鱗甲亂飛し仙鶴並舞ふて霜毛四散す、樹皆な瓊、階悉く璇。時に寒雲收て雨雪霽るれば千里の寒景晴朗明徹、况んや仰ては巍峩たる皓嶽皚々として寒影天に聳え、俯しては澎湃たる大海轟々として寒聲地を震はすあるをや。正に是れ一年最寒の季にして而して北陸四時最快の日なりとす。歎ずる勿れ東籬の寒菊既に荒蕪し盡せるを、南庭の寒梅將さに馥郁たらむとするにあらざるや。寒松と寒竹と巍々たる勁節は益高く、稜々たる

貞操は愈鋭く之に對する吾人をして轉た其志氣を壯ならしむるにあらざるや。早曉は須らく寒衾を蹴て起つべし、苟且暖を貪つて一日の計を失するなかれ。深夜は宜しく寒窓に向つて學ぶべし、偷安爐を擁して坐睡の痴を爲すなかれ。冬者歳の餘勉めざるべからず。而かも能く勉むる者は能く遊ぶ、寒中の遊吾人之を何れに執らむ嗚呼寒風に嘯ひて蓮湖に短艇を操り能はざるか積雪を踏で砂丘に狡兔を獵する能はざるか、身を鍛へ膽を練る寧ろ冬季を稱す。彼の寒の寒たるを恐れて寒を嫌ふもの抑以て神州の健兒となすべきか。寒や寒、是れ北陸の北陸たる所以。吾人喜で玄冥の回馭を迎ふ

天長嘉節

十一月三日、是れ天長の大嘉辰。我校例により同日午前九時職員學生一同講堂に會し、謹て尊影を拜し勅語を捧讀し右畢て解散す

同日午前九時職員學生一同講堂に會し、謹て尊影を拜し勅語を捧讀し右畢て解散す

恭しく惟みるに

今上陛下登極以來文に武に是れ勤み給ひ、神徳は八紘を蓋ひ國威は六合に耀けり。さるを頑清禮を失ひ敬を欠く、

堪んや。茲に國喪の日、十一月十一日を期し、謹て望哭式を舉げ、校長左の哀辭を朗讀せらる

陛下赫怒、膺懲の師を起させ給ひ茲に九月、本年四月を以て和を許させ給ふ。此に於て先きの八紘を蓋ひし神徳は愈大いに、六合に耀きし國威は益隆むなり。誠に曠世の偉略空前の鴻業と云ふべし、臣等草莽の徒何の幸か此の盛世に生れ、親しく

陛下の稜威を拜し奉る感泣奮激措く所を知らず今や誕辰に際し赤誠以て陛下疆りなきの寶壽を祝ひ奉る。  
天皇陛下萬々歲  
望哭式

近衛師團長陸軍大將大勳位功三級能久親王殿下薨ず嗚呼哀哉殿下は帝室の懿親を以て國家干城の重任に當り帝室の倚信して國民の具瞻する所なり曩に三軍の猛虎を統べ臺灣を鎮撫し瘴煙瘴霧を冒し山河を跋涉し兵卒と眠食を共にし艱苦を同うし恩威内外に行はれ全島戡定皇軍將に凱旋せんとするに當り病を以て薨せらる嗚呼哀哉本日は國喪を舉げらる國民たる者誰か慟哭せざらんや本校職員生徒講堂に會し謹て望哭の式を行ひ聊か哀辭を陳し以て殿下の英靈を吊し奉る明治二十八年十一月十一日第四高等學校長正六位勳六等大島誠治誠惶誠懼

瘴鄉掃蕩し盡して將に秋霽を見むとするに先たち、一朝桂樹枯凋 震悼を傳ふ、千古の痛恨何ぞ

愁雲閉ぢ青衫濡ふ、嗚呼於戲。

北陸史談會發會式

爾來屢々本誌雜報の材料たりし北陸史談會は着々歩を進めて遂に十一月十七日、尋常師範學校講堂に於て發會式を行ふこととなりぬ。同日午前十時會員の集まりし者無慮百餘名、劈頭發起人惣代登壇し名乗つて曰く予は是れ須藤求馬と依て同會設立の趣意を述べ、上は遠き神代より下は近世に至るまで引證考例、我北陸に關する夥多の遺事遺蹟の斯くあるへくして而して未だ燦然たらしむるものを列擧し、之を研究せむは到底一箇人若くは一修史局等の力の能く爲し遂け得へきにあらずる所以を説明し、幾百の會員、幾百の眼を以て此事を事とせば亦以て完全なる國史編纂の幾分を補ふに足らむかと續論せり。次て三間正弘氏代理櫻井鐵太郎氏及び安木田頼方氏各祝辭を朗讀す、赤羽萬二郎氏は北陸地方の歴史を研究せむには其何れより始むべきかに

就て卓厲風生懸河の雄辯を振へり、氏曰く第一宗教第二工藝と、其論說の詳細に至りては請ふ之を同會雜誌に徵せよ。次て浦井鐘一郎氏の講話は時に亭午に迫れるを以て次會に譲り、滿場一致三間正弘氏を會長に推薦し規則改正終て茶菓を供して散會す。聞く目下同會々員百九十名に達せりと、盛なる哉、然れども會員の多き必ずしも其目的にあらずるへし、吾人は第一着手として一日も早く同會雜誌の發兌を望まざるべからず、然れども雜誌は材料なくして成るものにあらず。於此か吾人は同會々員か奮勵一番其智識を傾けて投稿之か素をなさむとを望まざるべからず、而して是れ蓋し同會々員の深く自任する所ならむ。又聞く同會長三間氏は目今上京中に付幹事委員を指名する能はず、即ち豫選左の諸氏を得たりと

幹事 内山 行貫(師) 須藤 求馬(高)

委員 長 連恒(高) 有馬 祐政(高)

吉川貞二郎(高) 西村 尙新(師)

諏訪 藤馬(師) 青山恒太郎(師)

田中 直人(高小)

伊豆の舍歌會發會式

本校講師安木田頼方氏の會主なる伊豆の舍歌會

は十一月廿四日、其發會式を香林坊太神宮内神

宮教金澤本部に於て舉行し、式場裝置は總て正

式歌會に倣ひ、宗匠には伊豆の舍主人高橋富兄

北山重正、文臺運役に長連恒、島田志郎、批評に

香村茂富、松下雅雄諸氏あり。兼題「冬祝」當座

通題「殘菊」の詠歌を朗讀し會主の祝詞、會員惣

代協田琥一氏の答辭にて式終り宴酣にして餘興

あり、會員四十餘名頗る盛會なりしと云ふ。今の

世歌會の多き何ぞ限らむ、詠歌の夥き亦何ぞ限

らむ、而かも所謂天地をも動かし鬼神をも感せ

しむる底の秀逸佳調に至つては吾人不肖未た之

を耳にする能はざるを憾む。伊豆の舍歌會が皇軍戰勝積威磅礴たるに際し、其の呱呱の聲を擧げしもの寧んぞ大に期する所あるなきを知らむや。願くは超然脱俗徒に花月を弄するを以て事とするなかれ、敢て一言するは其會を愛重する所以

弓術的仕舞競射略記

斯道熱心家か待ちに待ちたる同會は愈十一月廿二日正午下りより無聲堂内弓術稽古場にて開かれたり、當日來會者は大島校長を始めとし大凡廿餘名にして先づ第一に角力的の射合あり、加藤英重君は敵二人を斃して竹内梅吉君に斃され竹内君は四人を斃して楠先生に斃され楠先生は十六人を斃して又向ふ敵なし、此に於てこの射を終り次て尺的競射あり射手は安藤豊、老田太文、河野義雄、永松文一の四君にして五度にて終り河野君五分の中りなりき次て八寸的の競射と

なり島田志良、山田義忠、長郷修造、草野正義、加藤英重、脇田琥一の諸君相並びて射ると五回島田、脇田二君中ると一本山田、長郷二君二本草野君中ると五分次に五寸的競射あり射手は宮地、横井、柏原、竹内の四君及大島校長にして五度を以て終る横井、宮地二君中つると三本竹内君一本次に楠正可君三寸五分的を射中つること二本なり終りて同點者競射あり先五分的中の河野君(尺)草野君(八寸)の競争あり草野君勝次に三本中的の横井(五寸)宮地(全)兩君の組となり宮地君勝次は二本中的の山田(八寸)長郷(全)二君にして勝は長郷君次一本中的の競射となり老田(尺)島田(八寸)脇田(全)竹内(五寸)四君にして脇田、竹内二君共的中し競伎二に分れ一は老田、島田兩君一は脇田、竹内兩君となり勝は前者に歸しぬ

それより三寸五分競射となり老田君宮地君一本

的中楠君二本的中せり續て同點の老田、宮地二君決勝の爲め又全的を射宮地君勝てり次で梅花の上的あり紅は三回射上白は六回射上白三回の勝紅は敗を遺憾とし三寸五分の源平競射を申込む白組には柏原、山田、宮地、永松、加藤、脇田、草野の諸君あり紅組には大島校長始め横井、竹内、島田、老田の諸君あり數回競射の上中原の鹿は遂に大島校長の手に射落されたり時に午後六時

受賞者左の如し

優等 一等楠正可 同二等宮地彦八 同三等老田太文 一等賞草野正義 二等河野義雄 三等宮地彦八 四等横井琢磨 五等楠正可 六等長郷修造 七等山田義忠 八等竹内梅吉 九等脇田琥一 十等老田太文

(某君授)

### 柔道紅白勝負

紅組	大島 亮治	丙	國井 和雄	丙
	笹川 四郎吉	丙	吉田 勝治	丙
	浦井 鱗次	丙	藤田 良平	丙
	安藤 豊	丙	大森 篤次	丙
	高松 勇	乙	中村 孝	乙
	久保田 整	乙	浦 五郎	乙
	秋山 信次	乙	澤田 堅太郎	乙
	近藤 常吉	乙	石田 莊二	乙
	森山 守次	丙	隈川 豊	丙
	柳田 友麿	乙	中村 光吉	乙
	大石 雄輔	甲	徳岡 精彦	甲
	永岡 堯	乙	深澤 新一郎	乙
甲	江馬 圭一	甲	山口 重作	甲
參謀	吉田 弟彦	參謀	紅林 豊治	參謀
四級	近藤他家雄	四級	高梨 恂一	四級
大將		大將	佐藤龜久治	大將

十一月二十三日午前無聲堂に於て柔道紅白勝負を行ふ、岩崎先生審判席にあり、紅十五白十六、相分れて紅白旗の下に陣す、勇士意氣昂り肉動いて堪えざるもの、如く、觀衆齊しく堅睡を呑むで水を打てるが如し、而も見よ殺氣は刻一刻迫りつゝあるに非ずや、審判官の立禮一の號令を待て此道場は一大修羅場とならむとする也。果然號令は下れり、兩陣齊く迭に立禮し了る、紅の先鋒第一は大島亮治君、之を逆へ撃つ者は白の國井和雄氏、亮治君年少、人多くは之を危む、而かも君の輕捷なる容易く國井氏の技にかゝらず、かゝらんとして又かゝらんとして而かゝらず、遂に足拂にかゝつて討死、討死は討死なりと雖則天晴なる討死なり、國井氏勝つと見るや、紅の笹川氏躍起となつて之に討てかゝり忽釣込足にて一本を得、次で来る吉田氏を巴投に投げ又藤田氏を押込にて押へ込み、稍疲れたる處を

白の大森氏に押へ込まる、大森氏既に連勝の笹川氏に捷ち又紅の浦井氏を釣込足にて釣り意氣や、昂りしも、紅に安藤氏あり難なく模捨身を以て之を平げ、次で白の中村、浦、澤田三氏を續けざまに倒し頗驍名を博し得たる後白の石田氏に押へ込まる、而石田氏は紅の高松氏に押へ込まれ、高松氏をとりひしぎ得たる白の隈川氏と紅の久保田氏との取組は面白くならむとして久保田氏微傷引分となる、残念、新に紅より秋山氏白より中村光吉氏出で、鬪ふ、秋氏は技を以て中氏は力を以て優り勝敗決し難かりしも遂に中氏の大外刈はよく一本を占め得たり、紅の近藤氏代て出で、大腰を以て中村氏を仆し、白の徳岡氏を二回押へ込みしも徳氏よく之をぬけ久しうして何れ勝つ可く何れ負く可くも見えず依て引分、新に紅の森山氏白の深澤氏と取組む、森氏一度押へ込まれしも巧に跳ぬかへし、大外刈かへしを以て之に勝てり、白の之に代て出たるを山口重作氏となす、願れば白の士卒既に多くは討死し生命ある者どては氏の外に參謀大將の三氏あるのみ、而も敵軍の紅には尙七人の驍將あり勝に乗ずるの勢なか／＼侮る可らず、白軍潜に憂色あり而山口氏に望む者大なり、果して拂腰を以て森山氏を倒すや否や次で柳田氏に拂腰にて大石氏に押込にて勝ち尙紅の驍將永岡氏を足拂にて拂ひ遂に參謀江馬氏を大外刈かへしにてかへし、紅白の旗色を大に引かへしたる後、快く紅の參謀吉田氏の横四方にかゝつて討死したる武者振天晴の者なり、こゝに脾肉の嘆ありし白の參謀紅林氏出でしも巴投にかゝつて脆く敗績、遂に又白の參謀高梨氏出で巴投と大外刈を以て連捷の驍將吉田氏を仆し、勢に乗じて紅の大將近藤他家雄氏に取て掛る、近藤氏實に此孤城落日の勢を間一髪に回さる可らず、而も

敵軍尙大將佐藤氏の腕をさすつて控ふるあり。

近藤氏せきにせき込で引仆さんとすれば當の敵高梨氏もさるもの、よくぬけよく防ぐ、此開敵

も味方も觀衆もひとしく手に冷汗を握て諦視するのみ、咄嗟、高梨氏は大外刈を以て近藤氏を引仆す、白軍萬歳高梨氏萬歳の聲一隅より起る、萬歳聲裡當日のチャムピオン高梨氏校長閣下より白勝旗を受け、白軍は大將佐藤氏を煩はさずして當日の勝を制したり、此後一週日の間此白旗は勝色見せて無聲堂裡に飜々たらむ。しかく白は勝てりされど驕る勿れ、しかく紅は負けたりされど沮する勿れ、二回又三回、勝て負て負て勝ての後は何れか勝ち何れか負けむ。こゝ奮勵一番更に數番を要す、

因記。當勝負施行の翌日、山口重作氏は四級に森山守次、深澤新一郎二氏は甲組に秋山信次、安藤豊二氏は乙組に何れも進級せられたり。

編輯子もと斯道に迂し、妄りに記事の筆を執ると雖唯大體に於て誤なきを保するのみ諒焉

### 實彈射擊演習

事實たれかしと希望し、長途行軍は已むを得ざる事情のあればにや遂に事實とならず、青衫四百就憐不平の氣、辛うして實彈射擊の硝烟と共に消散せしめざるを得ざりしは豈に遺憾ならずや。然れども屋後の紅葉は散り盡し庭前の菊も残し終んぬ、今に於て之を惜しむも何かせむ乃ち筆を更めて演習の概況を報せむ

大學豫科第二年生以上は十一月廿八日、同第一年生及豫備生中志望者は廿九日、各午前六時半校内靜勝館に參集せよと達せらる、期に先たつ一日午後の大雨は明日の運命を決定し、失望の中に其日を終りたるに何ぞ計らむ夜半寒月一輪清光霜に映せむとは、又何ぞ計らむ明くれは廿八日陰雲慘憺烈風肌を裂むとは、降りさうにて

降らぬ天候は出發を後らせ隊伍整々軍裝嚴めしく上野射撃場に至りぬ。好箇射手而して射撃の成績少しく恥かしき心地せらるは烟霧直遙して之を妨けたればならむ。廿九日も略同し。今五發滿點二十五點中十五點以上の者及び各級平均表を擧ぐれば左の如し

大學豫科第三年

一七點 湯淺 亮三

同 第二年

二〇點 佐藤 周輔

一七點 廣田 領治

一六點 朝長勘十郎

一五點 北村 澤吉

一五點 神澤 唯治

同 第一年

一八點 吉村 盛男

一五點 笠間 康

以上 平均點 射手人數  
 三年 四、八八五 三十五名  
 二年 六、七四〇 百 名  
 一年 六、七四九 四十八名  
 豫備 一、〇〇〇 三 名

故山形石田兩君

「年々に同し花は咲けども歳々人の異なるを歎きて、夢とこそ云ふべかりけれと貫之か詠しけむも理りけりな、あはれ諸共に學びの海に漕き出て、」など書き連ねたる一篇の廣告文は控所に顯はれたり。山形勇、石田他双郎兩君が青年有爲の身を以て一朝不歸の客となり、幽明境を異にせしより一は一年一は半年の日月を経たりとは夢寐猶其温容に接する吾人の信せむと欲して信ずる能はざる所、然りと雖も嘗て山形君に供へし所の菊花は今年のものならざるを知り、

先きに石田君を吊ひし日の暑きは今の寒きに異なるを見ては又之を疑はむと欲して疑ふ能はざるを如何せむ。茲に兩君の知友相謀りて金員を徴し有益の書籍を求めて以て本校に寄附し永く兩君が名残を止めむとす、知る知らぬ相率みて之を賛するは美舉なる所以にあらずや。特に兩君は共に射撃術に於て衆生に冠たりしもの、頃者同窓爐を擁して「此企を助け給はば如何でか兩君の靈の深き情を受けて天翔りつゝよろこばさ

而して此事たるや所謂愛國的精神の致す所か。將た島國的特徴の發する所か、今之を究めずと雖ども請ふ現に我校に於ける會合の亦決して僅少ならざるを見よ

らめや」曠昔上野射撃場硝煙の中我之を見たりと談笑せる談笑の内にも亦涙あり、噫

會盟諸團

之を嘗て海外に遊びし人士に聞く、曰く邦人の外國に在る者同郷相集まる三なれば曰く何郷懇親會と、同縣相集る五なれば曰く何縣親睦會と唯三のみ唯五のみ而して朝夕相見るの人。猶且つ會名を設けて以て限れりと蓋し事實ならむ。

北辰會。此は恐らく四高と異名同物と稱して可ならむ、分れて講談會、演說討論會、ベースボール會、ロンドンテニス會、フットボール會の五なる。郷里を以て命名せる者、能與郷友會、鎮西會、四國會、愛知郷友會、越前郷友會、越佐學友會、長州會、信州學生會、福井郷愛會之を數へて九。舊在學の校名を以て呼稱せる者、富山中學同窓會、共立學校同窓會、郁文館同窓會、英語學校(日本中學)同窓會、三友會(三高)京中會(京都尋中)之を閱して六。級會には文三年の茶話會、法二年の法二會、文二年の文友會、二部二年級會、法一年の法一會總て五。歌文を練るもの歌文會、尊王歌會、伊豆の舎歌會の三を



見。文を右にし武を左にするもの養浩會、求應會、照顏講、木鐸會、閃電會の五を聞く。特に奮起して校風の振作を企圖せるもの之を厚風會となし、常に其期の至るを待ち兼ねつゝあるを時習寮茶話會とす。僧家別に一會を設けて道友會と云ふ、北陸史談會と短艇會とは是れ又諸君の熟知する所

以上本校學生のみより組成されざる會もあれども會員の多數を占むる點より見れば之を校内の會と稱するも不可なかるべし。總て指を屈すれば四十に近し。單に吾人が知る所にして此の如し而して知らざる者固より一二に止まらざらむ吾人嘗て小會の多きこと本校の如きは蓋し異數ならむと云へる宜ならずや

記事片々

授業時限。爾來午前八時始業の所十一月廿五日より九時となり倫理科は七時廿分よりとなる  
 ポート命名。唯是れポートの命名なり然れどもポート會よりして之を見れば正に一會の大事、毀譽多く此に因る、謹まざるへからず。目下同

會員の選定中、須らく高尙にして勇偉にして讀み易くして稱へ難からざるものを選へよ。因に記す同會理事佐治修三君病氣全快したるに付築山直彦君の囑托を解けり  
 任免。十一月三十日左の任免あり

依願解雇  
 永井 尙賢  
 米山忠太郎

雇申付(化學副手)

永井氏の職を辭せられたるは一年志願兵の任に就かれむか爲めなり、軍國の志願兵の三字を聞きて床しき心地す、氏請ふ健在なれよ

講演。十一月廿一日福岡教授「土工に就て」講演ありたり十二月六日上田教授の講話ある由なれども未だ演題を聞かず

佳山君の名譽。佳山とは草野正義君の雅號なり第四回内國博覽會美術品評會に出畫し褒状を受けらる、聞く金澤に於て同會出畫の選に與りたるもの僅かに六名、堂々一家を成すの畫伯猶且つ斥けらる而かも佳山一介の學生を以て此の光榮に浴す、師中濱松香氏が落選に對し眞に所謂出盡の伎倆を有するものか。敢て祝す

附錄  
 秋季陸上大運動會記事



## 秋季陸上大運動會記事

卿賊永福永く福せず十年の虚名も今將た如何。夕電の閃くは刹那のみ朝露の結ふも轉瞬のみ。廟勝神の如くして籌策悉く齟齬し。當年黑旗將軍の末路狂態に非すむは徒らに悲境を畫くに止まる。あゝ東洋の陣雲こゝに且らく散し臺灣の勦除事漸やく定まれり。請ふ馬を華山の陽に放ち牛を桃林の野に歸す可き歟。月下の老狸をして太平を謠ふがまゝに許す可き歟。仰で西天を望めば妖雲峰の如くに簇かり俯して北海を睨すれば怒濤雷の如くに轟ろく。而かも劍氣冷かに流れて斗牛の間を横はる者を見すや。手に文筆を挾むもの尙ほ口尙武を絶やさざるはそれ何れにか基因する今や秋天高ふして征馬肥えたり。いふこれ講武の好時節と。あゝ將軍坤圖を按じ笑ふて歴々たる山河百千里を指すとき。我輩青衫また獨り髀肉の慨なしと云はむや。則ち衆聲喚呼し和しては陸上大運動會の擧となるものまた怪むに足らざる也。發起する者は職員有志并に大學豫科三年醫學部有志。大島校長を推してこれが會長と仰ぐ。十月十五日爲めに發起人の相談會を催し。越えて三日、學生控所に一大揭示は齎り。十一月三日天長節の嘉辰を下して、愉快なる盛大なる大運動會は、校庭運動場に於て催さるる旨をしるせり

## 準備

西奔東馳發起人は頻りに準備の爲めに躍り。諸般の雜務漸く終りを告げ。三日三日何ぞ來るとの

遅きやとつぶやかしめぬ。氣早の隼人は早や二人三脚を試み顛倒一番膝頭をすりむく者あり。滑稽の好漢戴囊を擬しては腰付、人をして抱腹に堪ざらしむるものあり。擾々たるうち一日は送られ二日は迎へられ三日四日は頓に流れ去り、今は指を屈して二週を出でず。この大運動會は催されむとせしに底事ぞ。虎頭角を戴て暴威尾城を壓し、爲めに我校も週餘の休業を見るの止むを得ざるに遇しぬ。學校の休業我輩寧ろ深く意に附せずと雖奈何せむ待ちに待たる彼の大會も、遂に延期の止むを得ざるに至る。この時發起人の落膽果して幾何ぞ。昔しは文公民衆の爲めに鯉魚の禍を除きぬ、今は吐虹虹を吐くこと三千丈、飲けたりとも硯あり兀たりと雖なほ筆あるあり。皺紙展はして爲めに逐虎の文を草してこゝに一週日、怪虎の跡漸やく絶て市内安全、諸生校門に出入しては大會の期日遂に定まり。招待状は雲の如くに發し寄附の物品霞の如くに聚まる。此時準備係眼を圓くし世話係足に豆を作り、記録先生筆を投して呻吟肩の凝るとを訴ふ。而も諸事整頓して些の遺憾をとりめざるの頃、愉快なる運動會の日は迎へられぬ。實にこれ十一月九日也。秋天雲飛ぶと速かに満山糝糊として辨ずべからずと雖、而かも一滴の雨たに下らず

## 會場の光景

校門を入りて西に折るれば一大アーチは、巍然として聳へ、劔戟霜を劈きてこれが垣根を結ぶ。アーチの下に番兵を作れるが如き、諸君醫學部十善會の寄附にかゝる。これを通じて歩むこと大約半町。大動運會の光景は參差瞭然として兩眸の間に在り。周圍二町幅七間、精圍の柵界はこれ

競技場たるを知る。國旗數十翻々として其間に樹立す。而も場の中央各國旗を以て滿艦飾を擬し紅燈數百流れて場景を添ふるが如きは、また去歲と異なるものなき也。巨椶の影萬葛錦を織るところ、幔幕優に引廻し。中央に殊に目立ちて聳えたるは時習亭なり。テニアルを圍むで椅子並ぶもの數十。机上の大花瓶には今を盛りの菊花を挿していさゝか躰裁を飾り軒にかざせる百紙旗は遠目には殊に引き立ちて覺へたり。而も食ふに菓子あり飲むに珈琲あり。來賓御腰をすえて動かざるは流石なりや。時習亭を抜むで來賓席保證人席は設けられぬ。賞品授與所は來賓席の一隅にあり。競技場の光景大約斯くの如きも場を去る十間に足らざるところに尙一二の假屋を見る。一は法二屋一は菊茶屋。何爲れぞしかく其名の商店じみしや。焉んぞ其名の風流を裝ふや。抑法二屋といつばこれ法科二年生の賣店也。さすが經濟書を讀みかぢりの御手前にや、勞力に對する報酬を妙なりと叫び出で。高價更に高價に押し賣りするも根が滑稽半分のすさびなれば唯來賓の好評を博しぬ。それパン一個は小學生の涙に値し、マッチ一箱は田舎爺の膽を引抜くに堪たり。而も武骨書生の御酌に麥酒三杯を傾くる者あれば、涙の烟草に咽ぶ大華手者あり。唯夫小生目下胃病パンは禁物ビールも禁物。それに加へて肺氣もあれば烟草は尙更大禁物と敵に後ろを見する者も百中一二はありしならむも。總して法二屋の大當り日なりとかや。偕も菊茶屋とは全く商賣氣を離れたる麥茶の振舞。萬壑の松風を一啜に供する雅人にあらず。「行秋や茶汲む男は貧書生」、大學豫科三年の寄附にかゝる。一杯可なり二杯可なり三杯四杯乃至八杯、唯それ腹を滿たして去らしめ、つとひ來る者引きもきらず、茶屋の入口に聯あり

麥湯宜療渴 喫烟姑可休

棋の上には菊を以て飾り詩句俳句並びに貼せらる、更に靜勝館の前、巨松天に沖するところ一臺の設けあり。蓋し豫科一年生の寄附になれる餅投場とか、唯夫れ二部二年や文科二年の諸氏は何をか企てつゝあるも、事天機を漏さむを恐れて且らくは黙せむ。

其他小使連の判し物等あり

利義元來有變通明時不說一瓢空知君貨殖由天命億中偏欽賜也風法三諸子張茶亭。一朝傳巨利。舉之義捐。以補會費云。(塾童)

開 會

時は來りぬ午前九時。來賓席にあり觀客場に在り。準備係溢聲高く喚呼する三度にして競技者相繼で顯はれぬ正に是

千旒旗幟影堂々、云是青年遊戯場 彼我輕袍分彩色 凜如寒菊誇秋霜 塾 童

順次既に定まりて左足出發點上にあり。相並ぶ者皆是錚々たる運動家、赤勝たんか白勝たんか、桃、黒、綠青何れか勝たん、千目萬目等しく競技者の上にかゝれり。鳴鈴三度轟きて前身悉く傾きぬ、銃聲一發、砂高く捲きて鐵脚駿馬に駕す、奔ると未た百ヤードに充たずして白黃獨り衆を抜くと間餘、奔るか飛ふか足の地に着くを見ず、彼は風に駕して獨り決勝點に飛び入りぬ紅旗頻りに振つて喝采四に起る勝者は誰ぞ、特に記す山口重作氏、實にこれ當日第一の早着。渾身の意氣は吐て這般の光彩を觀る

一等(白黃)三十四秒 山口重作 二等(鼠) 竹内梅吉 三等(紫) 金森種次

第二回二丁競走。勝旗尻目にかけて立並びたる百十餘の健兒、我こそ紅旗を擁せむとの顔色は中々に勇ましかりけり、銃聲一發雲霧々、

一發雷轟逸鷺鳩眼中不識孰其優走來奔去疾於矢北地南天風馬牛 塾 童

半周の頃ひ白黃、白衆を抜きて競ふ、白勝つべきか白黃負けざらむか。僅かに三步、三步の差を以て白黃は紅旗に迎へられ、無念高く叫んで白は後を顧れば、二間を距て、青の走るを見る

一等(白黃)三十秒 渡邊 鑄 二等(白) 田宮春策 三等(青) 甲谷三吉

第三回二丁競走。第一第二の勝利に胸先づ沸き。此度こそは我番なり。紅旗寧ろ確く立つるを要せず、早晚乃公が之を抜くの勞を如何と、大兵小兵波の如くに並ぶ。五尺九寸は田中氏に非ずや、氏の一躍は六尺を越えん、而もなほ時に屏風倒れの望なきに非ずと小兵の人は思ふなる可し。合圖と共に奔走する其利那、先生既に逆上して轉倒するもの四五。得たりと飛び越すは運動のチャン雙肩風を劈き兩脚土を蹴る。先づ抜きしものは誰ぞ紅、紅、紅、而も白綠田中氏は遂に倒るゝとを免れて既に敵に迫る、哀れ紅は白綠の爲めに抜かれ終んぬ

一等(白綠)三十秒 田中正太郎 二等(紅) 渡邊信齋 三等(青) 中村春生

第四回二丁競走。決勝點前に控へて淡紅先づ僵れ、綠次ぎて僵れ青またこれに伴ふて僵る、一度僵るゝものはまた立ち上らんとしては僵る、蹠々跟々見て而して怪なり而も僵るゝものは如何の情、此時遙か後なりし白青、嘯く虎の如くに奔つて決勝點に入る

一等(白縁)三十秒 佐藤龜久次 二等(白青)五十嵐嘉一 三等(青)志賀 新  
第五回提灯競走。飛んで行く時半週にして健兒悉く僵る、僵るに非ずして止まるなり。提灯取て摺附子を奪ふ。事倉卒にかゝる提灯撰むによしなく附子撿するに暇なし、あゝ去年の遺物を取りしものは不幸のみ、附子の燃へざるも不幸のみ、あはれ提灯にも秋風さそひけん、骨まばらに顯はれて其紙半ばは破るゝものは微風はつかに襲ふては折角の蠟火忽にして消ゆ。辛ふして弓張月の腰あぶなげに、一歩行きては内を窺き二歩過きては後を顧る。前途望遠くして燭光漸くうすし、此時の心中頼みなきこと幾許ぞや、而も一等二等既に敵手に落ち三等四等今や殆んど鞭をつけられんとせしむ、五等なほあり、豈に急ぐべけむやと、落付はらひて提灯大事に、ひよこく歩むは誰とかなす

- 一等(黒桃) 宮川 鼎 二等 中大路正雄 三等(白黄)鹽谷義一 四等(青)高松 勇  
五等(白縁) 笹川四郎吉

第六回 提灯競争。決勝點前燈火滅すこの時の遺憾焉ぞ禁せむや。蹉跎幾度かして提灯を大地に抛つ。抛たれし提灯あゝ何の罪かあらむ。前に大事と抱かれつるもの、今は捨てられて又顧られず。己れも嵯峨野の秋と啣ちてか、つぶれし顔に皺さへ添へぬ

- 一等(鼠) 佐藤信安 二等(紫) 中谷正造 三等(淡紅)知宇信吉 四等(白)山本信夫  
五等(黒桃) 竹俣吉松

第七回戴囊競走。戴囊なりなく、脚も大事ぞ頭も大事。足に氣を込めむか戴囊紛として落ちん頭を謹まむか双脚蹙んで伸びず。よし腰をすえて双脚唯それ走らむか。而もこれ宛然たる一葉の狂々書。健脚を以て己に一等を制したる山口重作氏は、無殘、決勝點前戴囊墜ちて聲あり

- 一等(淺黄) 三好久朋 二等(黒) 吉川三雄司 三等(黒淡紅) 高口保太郎

第八回六町競走。初より全速力を以て走り出せる白黒は第一週に先着、これに次ぎしは白青なりしが、第二週に至りては白黒の步調頗る倦みて黄に抜かれぬ。今は三週勝負の境、眞先に進みしものは黄次ぎては白黒、満身の意氣双脚にこめて其勝敗をぞ争ひける。而も初めに擢てし者永く擢つべきに非ず、先づ後れしもの尙餘勇の鼓すべきあり。追ひ抜き追ひ抜く健兒の振舞、あはや決勝點は目前に在り、紅旗を擁して斃るゝは丈夫の希ふ所、焉んぞ途半にして止み、腫を衆前に曝さむやと、眼中血走り吐息も荒く、我れ第一と前後する様勇なる哉健兒壯なる哉好漢、古しならば天晴の武者振やと譽めもやせん

- 一等(黄) 田中秀夫 二等(紫)原田永治 三等(白青)横地錠二

第九回二町撰手競走 出發點に相並ぶものは僅かに四人而もこれ皆相譲らざる健脚家、一度は紅旗を擁して喝采萬口を動かせし者而已。而して此四兵兒は更に其優劣を試みんとす。正に是驪龍三四雲を起して珠玉を相競はんとする偉觀なれば、運動場裡幾萬の觀衆手に汗握りて何れが勝たんと噂とりとなり。嗚呼勝つ者は儼たるメダル其胸間に輝かん。衆生に擁せられて大々名譽を博さん。一舉一擧この一擧はまた以て四回五十の衆に勝ちたると同じ。望見す白帽を戴ける者は布袋然たる佐藤氏に非ずや。紅帽を戴ける者は紳士然たる渡部氏に非ずや。唯夫れ韋駄天の稱あ



る山口氏に至ては落付はらつて青帽隻手に弄し、燈籠竹の綽名ある田中氏に至ては頂上黄帽をやどすなり。鈴聲一鳴、鳴は愈急に二打三打。白煙銃に迷ふて爆聲耳を劈く。青と紅とは相並んで真先に進み、黄と白とは途半にして大に後る、決勝點決勝點今十間を距つ、一躍二躍直ちにこれに跳り飛越んとせしは誰ぞ、咄嗟青僵る無残、紅は内側を抜きて直ちに決勝點に飛ぶ、而もこれ底事ぞ判定係高く呼んで不正なりと喝す。僵る僵る何によりて僵れし、不正不正何を以て不正となす。判定係は相會し大に討議す。紅は青を衝き除けしこれ故意のみと、議既に決す。また争ふべきに非ず、紅は黙々冷笑して退きぬ。後れて着せし人は一等。メダル燦として黄の胸に照らせり

メダル 田中正太郎

十回提灯競走。提灯競争の如き前後通して八回の多きに達す。走るものゝ態は同じき而已、筆を別つて一々之を綴る請ふ且らく止めむ

一等(黄) 神澤唯治 二等(緑) 大島辰之助 三等(鼠) 遠藤金市 四等(紫) 渡邊信齋

五等(青) 廣野喜久雄

十一回 柿拾競走。運動家の熟練によるか、將た發起人の意地悪に出でしものか、一堆の柿實其數は十也。實にこれ去歲よりは三個を増せしもの、これを拾ふは容易の事に非ざる可くまかも輸贏を競ふに至ては豈に大難事と云はざる可けんや。唯夫れ勝旗樹立して五流驪る。一人を越え二人を追ひ退げんか一等とはゆかずとも二等三等乃至四五等、只其好むところに任せん。若し又不

幸にして遂に勝旗を敵手に譲るも十個の甘柿。味ふも亦可ならずや。いふは是而已。請ふ其勝敗は次の姓名を見て知るべし

一等(白) 田宮春策 二等(淡紅) 谷口長松 三等(黄) 井原 悟 四等(緑) 橋本正治

第十二回四町競走 頭に白縁を戴く者殊に衆を抜て走る。一週にして彼が第一着は人の疑はざるどころ、而も二週の途半ば、紅旗しきりに流れて彼を塵きしに如何にせし。決勝點前二十間に於て飛ぶが如き黒は其内側より抜きしかば、白縁今は躍起となりて後れじものと進みしかど遂に一歩の差を以て、無念く怒鳴りけり

一等(黒) 一分十三秒 吉田哲雄 二等(白縁) 石田莊二 三等(淺黄) 富田信一

第十三回戴囊競走 初雪を手柄に戴せてかへりけり 秋 竹

かへりし人は誰とかなす

一等(白黄) 三十三秒 赤澤欽次郎 二等(黄) 慶松勝太郎

第十四回スプリンレース 我様の運動會に於てスプリンの技を見しは蓋し今回を以て初となす、戴囊素より易からずと雖、スプリンレースより見れば實に同日の論に非ざるべき歟。試に競技者の心裡を解剖せむには必ず成竹か野心はあるべし。竊かに期す一發の銃聲に氣先づ顛倒し、跳一跳の其刹那轉々として墜ちたる他の狼狽を嘲り、獨り泰然として緩歩一等を制せん歟。なんどの野心は一人の私すべき處に非ず。秘訣と思ふ者眞の秘訣ならず。銃聲高く轟て衆皆靜然緩歩更に緩歩にして遠謀其圖に當らず。此時衆皆相顧て笑ふ。最早詮なしと走り出でし者は白球轉々とし



て墜つ。漸くにして躰熟練し稍其歩調を急にするに至る。此時餘りに落付きし者は今頗る後れ。彼時頻りに立ちし者は途半にして敗る。其形態奇々妙々にして頗る観客の笑を博せり

一等(紅)二分五秒 丸山萬三郎 二等(緑) 金森 種次 三等(青) 信濃榮三郎

四等(白赤) 新美徳五郎 五等(白緑) 神澤 唯次

第十五回 同上

第十六回 二人三脚競走。

何來一隊鬼人男 四手兩頭其脚三 最怪中途相踴躓 半身向北半身南 塾 童

白紫飛ぶが如くして優に衆人を抜き、掛聲勇ましく遂に紅旗に飛び付きぬ。其足調の整然として宛然一人の走るが如きもの、思ふに夕陽西に沈んで練兵場裡人静かなる時、幾度か轉倒して遂にこの熟練を爲せしによらん歟。而もこれ一般の噂に止まると雖其成功の跡を温ね其得意の状を察すれば、蓋し甚だ詭たるに非ざる可し。白の如き頗る勉めたりと雖焉んぞ此大敵手に勝つとを得べき。十五間の差は明かに二着たるを示めしぬ。唯惜かりしは赤なる哉。僅かに一間を以て遂に三着となり。四手徒らに振り四足空しく歩み、悄然として退きぬ

一等(白紫)三十五秒 築山 直彦 二等(白) 中屋 重業

第十七回全上 布袋唐子を抱て常に運動會の奇觀と稱せられ、二人三脚は一手販賣が專賣特許の如く、出つれば必ず一等を制すと謂はれし佐藤龜久次氏、今回は如何なりけむ。唐子を捨て、毘沙門を擇みぬ。成功不成功は普人の疑ふ所なりしに、和尙便々たる腹をたゝきて何のそのと叫ぶ。

果せる哉一等は難なく其手に落ちたり。之と競ふ者は誰ぞ。桃の健兒阿部中村の二氏、實にこれ去歳の二人三脚撰手競走に於て、佐藤氏と其メダルを争ひたる好敵手。しかも今また三間の差を以て白旗(二等)の下に立てり

一等(青)三十七秒 佐藤龜久次 二等(赤) 吉田 幅誠  
田宮 春策 林 義輔

第十八回幅飛 豫め競技を申し出す者甚少く爲めに臨時募集の舉に出でたり。準備係即ち之を會員席に募るに聲に應じて場に顯はれ出づるもの十を踰ゆるに至る。鐵釘様の足は某之を具せり。長髓彦は某よくこれに似たり。而も短軀瘦身の人あり。長大肥滿の客あり。彼れよく越えんかと疑ふ者なほ巧に越え。彼れ或は飛ぶに妙ならむと思はるゝ者、却て飛ぶに拙なり。一回は一回に尺度を増し。これに従ふてフェールする者また多きを加ふ。敢て問ふ勝者は誰れ。自から野次馬と稱して飛入したる江間氏は、十九呎を跳り越てメダルを戴きたり。二等三等果して誰とか爲す

メダル十九呎 江間 圭一 二等十八呎九吋 田宮 春策 三等十八呎 秋澤 欽齋

第十九回高飛。昨年 of チャン石井循君は扣えて出でず。五尺三寸の偉觀再び見るを得ざりしも。四百青衫のうちこれに次ぐべきの人に空しきと云はむや、瘦身短軀走つて五尺一寸餘を跳り越し。天晴の名を博したるは誰あらふ。皆是飛入の所謂彌次連。飛入の名またこれ吉兆たりし者歟

メダル五尺一寸五分 長島 清松 一等五尺五分 安藤 豊 三等四尺九寸五分 佐藤 家太  
第二十回竿飛 長さ足らざる一竿を持して、一丈一寸を試みんとしたる前會の安藤氏、當時如何に喝采を博したるかは今なほ諸生の腦中に畫かるゝ所なれば、今回の竿飛又々一等を制したるは、

別に怪しむに足らざるが如きも、其手際の見事なるは何時見ても感歎に堪へざる也。三寸のハンデーキヤップ何の憂ふる所。而も丈餘の偉觀遂に見る能はざるを恨とするも。敵手既にすでに僵れたりまた奈何せむ

一等(淡江)九尺二寸五分 安藤 豊 二等(白)八尺九寸五分 澤田堅太郎

三等(紅)八尺八寸五分 柏原 省私

第二十一回四町競走。鈴々たる早走家は相並んで前の二回に配當せられたれば、今の競争に於ては頭角巍然抜群の譽ある者、殆んど見るによしなしと云はん歟。而も尙且勝敗のあるあり。渾身の勇を呵して走る状、相伯仲して却て眼を惹くに足るもの多かりし

一等(紫)一分十秒 傍士 定治 二等(鼠)金森 種次 三等(桃) 茨木清次郎

此時日既に中して時鐘十二點を報ず。其響殷々空腹を通して鳴る。之に於てか來賓は導かれて静勝館内の食卓を圍み、會員四散して頻りに握飯をかざる。休憩するもの大約半時。市内の各學校生徒幾千人相携へ相導きて、縦覽者今は萬を以て數ふべきに至り。競技場邊、また立錐の地なきに至る。此時奇帽を戴き呼聲面白く群衆の間に横行する者は、また彼の法二屋の賣子連に非ずや。御安く致しますは中々に宜しけれど。君一つ買ひ給へは何等の諧謔ぞや

鳴鈴幾度か鳴つて、更に開場は示されぬ。此時

場の東隅より静々と顯はれ出でし一列の紛裝は、身には薩摩飛白の單衣を着け、小倉の袴裾高に穿ち、白鉢巻に白鬻とよ吹く風に靡かせ乍ら、腰間の着鐵は三尺の長きを擇びたる雄々しさ。威

風淋漓として場の中央に進み出でしは、これぞ時習寮生の寄附なる劔舞とこそは知られたり。舞ふ者は一列に並びて來賓席に向ひ、吟ずる者は二列をなして其後に立つ。

一禮恭しく終ては吟聲嘍唳として起る。音を抗げて高く歌へは劔を抜て起て舞ふ。長吟すれば則緩に、促節なれば則急に。たとへは王子鳳歌を吐て鸞鳥飛來して舞ふが如き者、而も彼は頌歌にしてこれは壯曲。秋水閃ては白龍左右に躍り。滿腔の意氣こゝに電雷を叱す。あゝ是れ月性が短刀の歌に非ずや

## 短刀歌(其一節)

我期忠義磨鋒刃 短刀直入長銃陣 不顧彈丸雨注來 紫電光中霹靂震  
千羊萬犬千兵塵 黒烟拂盡蒼天高 仰天一笑拭鮮血 白日光寒日本刀

千羊萬犬豈に彼時のみならむ。浦賀灣頭月青きの下、黒船出沒頻りに邦國を窺ふの時。月性當年の悲憤果して幾何となす。一字は涙一句は恨。多涙多恨發しては即ちこゝに短刀の歌となる。其辭尙且激越壯快なしと雖、深く彼が心事を顧れば、人をして未だ血に飽かざる短刀を撫せしむる者なからむや。一度閃かしては骨山血河をなさむ歟。山河西に走つて幾千里。この時誰かよく天を仰て一笑する者ぞ。今は見るこの一番の劔舞、舞ふ者吟ずる者、徒らに聲を放ち劔を弄する者にあらざるを。忠義鋒刃を磨く抑期する所なくして可ならむや。一萬の觀衆寂として聲なく、時にチェストを絶叫して毛髮天を衝く者を見るのみ

舞ふ者は退き吟者は去る、跡に残るものは尾城の楓雨三葉、宛然鮮血を以て染められしが如し

第二十二回提灯競争。扉は月を翫ぶによりて紋角に生ずといふ歟。象は雷に驚かされて花牙に入るといふ歟。然らば則ち人は提灯を携ふるにより、狂姿笑態其身に供はるといふ、何の不可かわらむ

一等(紫)二分 田中 秀夫 二等(黒淡紅) 三好 久朋 三等(緑) 下村繁太郎

四等(黒桃) 石川 謙吉 五等(白黄) 石黒爲次郎

第二十三回同上 嘗て聞く丸山作樂晝提灯を携へて城門に入り、深く天下の驚をかひて而して身幽囚の辱を蒙る。而も今は提灯を携へて頻りに衆の喝采を博し、賞品肩に擔ふて自から得々たるもの、僅かに三十の星霜にしてかくも變れば變る者哉

一等(紫白)一分四十秒 田上 清貞 二等(桃) 松浦圓四郎 三等(淺黄) 藤田 良平

四等(白) 吉村 盛男 五等(黒) 國井 和雄

第二十四回四町競走 去歲の四町レースに、妙な身振におどけるも、第二週には見事三等を博して一時其名を呼ばれたる赤禪將軍、築山直彦氏は、顯はれ出でぬ。而も今は敢て跳らず敢ておどけず、いとも眞面目に走りければ、すは大敵なり油断すべからずと思ふうち、こは如何に第二週の途半ば、ころりと顛がる其轉瞬、身はまた走る見事の振舞、これもおどけの一種とや見ん

一等(青)一分二十秒 鹿取 龍造 二等(黄) 築山 直彦 三等(鼠) 中谷 正造

第二十五回盲目旗拾。

聞目見明瞑目暗 分明黑白我心知 如何跬步俛々起 不辨顔前五色彩 塾 童

場の中央三十間を距て、各色旗繖々として林立す。競技者は一列に並んで豫め旗の所在を明か

にせり。今や一令の下其目は塞さかれ、あはれ生れもつかぬ盲目とはなりぬ。天地朦朧として白霧の裡に没せられ東西知るなく南北辨せず。如何にしてかまたその旗を抜き、これを負ふて更に發足點に歸せんや。銃聲一發逡巡として出でざるもの三四、既に走る者もなほ旗の所在を失ふもの、或は知らずして方向を左右に取れるもの、如き三十間を過ぎ四十間を行き遂に木柵に達しては觀衆に叫はれて氣益々轉倒、右にとつて走り左に従ふて奔る、その態その姿また以て抱腹に堪えざらしむる者あり、盲龜辛ふして滄海に浮木を得、幸に走り返へる者は勝者の一人、布片かなぐり捨て、今は他人を笑ふ。あゝこれ何等の無邪氣ぞや

一等(緑) 湯川 宗理 二等(淡紅) 宮北 友吉 三等(白青) 鹽谷 宜一

四等(黒) 笹川四郎吉 五等(白黒) 辻岡 律

第二十六回二人三脚撰手競走。場に顯れ出でしは(緑)佐藤(田宮)と(白紫)築山の兩組なり。共に笑ひ

共に咲む。あゝ笑ふあゝ咲む、思ふに胸裡成竹の存するが故か。而もメダルは一個のみ何れか勝ち何れか負くるを要す。双龍の相闘ふや玄雲を起し兩虎の相搏つや怪風を生ず、この般の偉觀今は運動場裡に見るべきか。鈴鳴り銃響く、咄嗟砂を蹴立て、飛ぶ兩組の競走。さはれ常に一間の差を持って遂に決勝點に跳り入りぬ。先なるは誰そ後なるは誰そ。メダルは遂に何れの手にか落ちし

メダル(緑)四十秒 佐藤龜久次 田宮 春策

第二十七回スプリンレーン。柿拾スプリン技相同じ、請ふ塾童の七絶を寫して更に幾多の趣を添

ん

顛顛滿抱難欲馳 拾得其一領其頤 猿猴擒縱更何術 箇々銀毬在玉匙

一等(淡紅)五十秒 小島 顯治 二等(黑淡紅) 渡部 鑑 三等(鼠) 田中 健治

四等(赤鼠) 木下 克雄 五等(青) 今井 三郎

第二十八回戴囊競走。スプーンと柿拾と相似たるが如く、戴囊と提灯と技相類す、即ち更に塾童の一詩を添へん歟

頭上囊難得中 將燃燈火惡微風 囊傾火滅入先走 畢竟輕跳不奏功

一等(紫)一分 中山 清造 二等(緑) 森部 孝郎 三等(白) 山本 信夫

第二十九回六町競走。眞先に走る者は白黒に非ずや、初めよりして全速力を以てす人多くは之を危みしが第一週には白黒一たり紫、桃之に次ぎ、第二週には白黒これが先たり黄桃これに従ふて走る、今は三週勝敗の分るゝところ。而も白黒未だ全く疲るゝなく、なほ眞先に立つて進むと大凡半週。此時迄遙か後にありて鋭氣を養ひたる黒は、俄かに跳るが如く飛ぶが如くに衆を抜き、直ちに迫りて白黒を抜き遂に紅旗の下に立てり

一等(黒) 田中正太郎 二等(白黒) 上田 恆雄 三等(桃) 赤澤欽次郎

第三十回提灯競走。例によつて例の如き而已

一等(黄) 小西 虎造 二等(青) 紅林 豊治 三等(紅) 龜田 伊門

四等(淺黄) 長島 清松

第三十一回四町撰手競走。相競ふて走ると稱すべきは緑と赤あるのみ。而も遂に赤は四間の差を以て緑を壓制し終んぬ。名譽なるメダルは其掌に握られぬ。緑とは誰ぞや傍士定治氏赤とは誰ぞや

メダル(赤)一分三十二秒 吉田 哲雄

第三十二回一脚競走。(壹町) 競技せむとする者は僅かに八人のみ。而も其中に一人の編輯子は加はりぬ。彼の筆は我よく知れり唯彼の足に至てはすなはち如何。戯れにこれに語つていふ桂先生にしてなほよく一等を制するあらんか。吐虹に虹を吐くの奇觀なしとするも、なほ且つ大法螺にても並べ立て、足下の美香を吹聴すべしと。鈴鳴るの時先生既に飛ぶに巧なるが如く既に銃響つては先生枯木の如く、すくと立つて無念くど叫ぶのみ。此時先づ進む者は淺黄にして遙かに後れし者は青なりしが未だ三四十間に至らずして青眞先に進み出でたり

一等(青)三十秒 赤澤欽次郎 二等(淺黄) 五條 圓隆 三等(桃) 阿部政次郎

此時群衆俄かに動搖して西に向ふて走る。底事ぞ底事ぞ何爲れを走る。記者またこれにともなひて走れば、今餅投柿投の眞際中なり。餅に頬をたゝかれて悦ぶは何等の痴姿を柿に頭をはつられてうれしがるは何等の狂態ぞ。就中最も可笑しかりしは幾多の田舎爺、兩手を舉げて佛に向ふが如く、旦那さんくど聲を限りに呼ぶ奇特にや紅白の餅は天下りして、そが赤毛布に盛られし事なりけり

此時運動場に歸へり來れば二部二年生の秘密の魂膽こゝに黒幕を切て墜せば。風船二三風に従ふ



て飛び去りぬ。先づ喝采する者は御主人公二年生。これに和する者は觀衆の人なりけり。三十三回障害物競走。障害物分障害物世路の辛艱殆んど相似たり。嗚呼五十年の歲月はその辛艱を脱するに苦しみ。一時の競走はこの障害を攀るに務む。人生の事辛艱を経るに非ざれば總て其名をなし難く競走の務は障害を過るに非ずんば嘗て譽をなすによしなし。而も彼は忍耐を以て其經となしこれは急進を以て其緯となす。

二間のハンデーを附せられたる安藤豊氏は竿飛に喝采を博し高飛に令名を得たる人に非ずや。而して今は彼障害物の前に立たむとす。奈何勝敗の決する所且らく刮目して見ん。抑も今回の障害物を以てこれを前年に比すれば更に幾難を添へられたる也故に競走の苦も頗る前回と異なるものあらむ歟。天網恢々粗にして漏らさずと雖これは是人網密にして脱し難し。葡萄棚を攀る者は先づ番人の叱咤を蒙らむも、この棚攀ん者は悦で迎へられん。垣を踰へ輪をくぐる諸ろ天下一般の狀態と異なる。衆皆障害に阻むの間黄帽一人走つて決勝點に入る。二等は七間の差を持し、三等は更に後るゝと三間

一等(黄)一分二十秒 安藤 豊 二等(黒) 渡邊 信齋 三等(白赤) 田中 秀夫

第三十四回武裝競走。初め武裝競走を申し出せる者は二十一人の多きに達せしも、實際場裡に顯はれ出でし者は僅かに五人。而も皆是れ有數の健脚家のみ。其競走の面白きにこれに添ふるに武裝の雄々しきを以てす。焉んぞ千目萬目を牽かざるとあらんや。四人は一列に並び一人二間を距て、後る。これぞ去歲に人目を驚かしたる佐藤家太氏にして、今ハンデーを附せられし者とは知

られぬ。白烟銃を迸る機一髪、駝鳥の如くに走り出でしは彼の佐藤氏に非ずや。未だ二十間に至らずして既に衆を抜き劔を帶て走る。この時白青後るゝと三間。既に半週に至つて背囊とつて背になげかけ、内側を走つて決勝點に入らんとす。あゝ彼は銃を取るとを忘れたる也。蹉跎蹉跎機既に失す、無限の恨は空しく場裡にとめて去る

危機一髪彼中原 獲鹿奇功誰手存 高踏憐他空解劍 無人敢說布衣尊 熱 童

メダル(白青)三好 久朋 二等(赤鼠) 中屋 重業 三等(紅) 田鶴濱又三郎

第三十五回戴囊競走。皆是撰手なり、而も戴囊紛として墜るは如何。唯獨り眞先に進みし中山氏、今決勝點を距つる僅かに六間。落花枝に上らず。墜囊また戴くによしなし。可憐メダルは人の擇むを許さず

第三十六回來賓職員戴囊競走。俊鷹は久しく林に栖む者に非ざる可く、活龍は永く水に潜むものに非ざる可し、知らずや乃公は嘗て某校に在りしの日、健脚を以て一校のチャンと呼はれし者なるを、乞ふ今林を脱し水を去づて此運動場に顯はれ、妙技絶藝敢て諸人を驚かさむと、募に應じて跳り出でし者は二十三十、髻裡辛うして其顔を認む可き者、風姿洒瀟貴公子然たる者、百鬼夜行の扮装こゝに漸く整ひたるも、其數超過して競技に便ならず、即ち別つてこれを二とす。銃聲に續きて走る來賓職員。而も擢んでし人は誰ぞ我校の出身今は士官候補生たる飯森亥三郎氏

一等四十秒 飯森亥三郎 二等 福見常二郎 三等 福岡清一郎

第三十七回同上。秋竹句ありまた妙ならずや

種々に狐ばけたり秋の雨

第三十八回片脚の競走。片脚の競走は九で競走に非ず。二間のハンデは唯これ見戯に等し。あはれ二三十間のハンデならば、それこそ乃公の技量を顯はすに足らん歟と。叫ぶ聲鶴の如くにして獨り得意がる紅將軍。一躍二躍未だ三躍に至らずして既に衆を抜て進み、大言遂に大言たらずして易々と紅旗の下に立ち、願れば二等は未だ決勝點に七間を餘し、三等更に三間を差ふ。

- メダル(紅)渡部 鏑 二等(黒) 江間 圭一 三等(桃) 阿部政二郎
- 第三十九回提灯競走。
- 一等(白) 堀 覺太郎 二等(紅) 吉田 哲雄 三等(白緑) 森部 孝郎
- 四等(紫) 小川清太郎

第四十回 同上

第四十一回六町撰手競走。一週二週。三週半はにして敵事今は争ふに力なく、自から退て其技を止め。田中氏實に獨舞臺の觀を呈せり

- メダル二分三十五秒 田中正太郎
- 第四十二回スプリンテース。
- 一等(白緑) 佐藤 家太 二等(白黄) 老田 太文 三等(紅) 寺崎 新策
- 四等(桃) 萩野 重吉 五等(白黒) 廣田 領治

第四十三回擔荷競走。

雙肩擔得名聲美 德業前賢且可比 未識仲由僭石儲 爲親負荷來千里 熱 童

六貫の重荷左右に跳り、これを擔ふて足爲めに踰限たり。形態妙絶人の臍を轉せしむ。翻身飛んで出づ出發點。幾多の漢子は前後を競はんとするがなかに、殊に目立ちて進みしは白頭子なり。其狀獨り奇ならず妙ならず。十年の苦辛初めてその術を得たるが如く。喝采くくに迎へられて直ちに決勝點に入る。此時遙か後れて淺黄の進むを見更に三間を距て、青の喘くを見たり。唯夫黄の如きは更に更に幾間の後に在り

- 一等(白)四十七秒 東方伊三松 二等(淺黄) 茨木清次郎 三等(青)近藤他家雄
- 四等(黄) 築山 直彦 五等(白黒) 竹俣 吉松
- 第四十四回障害物競走。

鉄綱亂梯又斷棚 當途障害百千横 勞來筋骨須商略 天以斯文附我生 熱 童

眞先に跳り出てしは短身瘦軀の緑。其身輕なる様宛然猿の樹を攀るが如く、更に栗鼠の棚をつたふに似たり。彼は二間もあらんと思はるゝ、高垣より飛び下り、空に懸りたる竹輪をくわいりけつて、直ちに奔つて決勝點に着し、頗る一般の喝采を博しぬ

- 一等(緑)一分二十五秒 紅林 豊治 二等(白黒) 今井 三郎 三等(淺黄) 信濃榮三郎
- 此時各色の小旗數百本を携へて來賓席に頒ち、更に幾千本を持ってこれを縦覽の小學生に與ふ。兒童争ひ來つて旗を争はんとし。肩に攀ぢ袖に下がり、手をとらへ足に纏ふ。あゝ此旗こそ最後の競走各級撰手の相競ふの際。各持する所の旗色につき、大に氣勢を添えしめむとを務むるが爲

而已。而して勝者の色を以て、歸途同色の旗を携ふる者に菓子を與へんとなり。また來賓席に頒ちたる小旗には、各連歌の上下一句を書せり。これ菓子に代ふるに福引を行ふによると。かゝる考案を出し風彩を添えんとしたるは、知らず誰が企ぞ何級の寄附ぞ。あゝこれ文科二年級生が人の意表に出でたるすさびとかや

や、しばし経て、劍舞はまたも演ぜられ、觀衆は手を拍ち聲を放つて、この諸氏を迎へぬ。吟聲起れば舞者劍を抜て跳る。劍輪飛ぶところ天日光なく、壯歌發する時乾坤闐たり。其詩に曰はく

## 擬 行 軍

貔貅十萬勢縱橫 天地誰能敵我兵 峯巒深山驅猛虎 森茫碧海掣長鯨

寶刀曉冷霜餘影 鐵笛秋高月下聲 飲馬大同江水去 一鞭直指九連城

天を仰て一笑し、地を蹴つて怒號す。一扇遙かに指すとき意氣軒昂し、忽ち坐しては旭扇高くかいく。此時群衆腴肉をたゞき、快呼更に快呼を叫んでは天柱地軸動く。熱童記者の傍にあり。胸を打て低聲吟して曰はく

三尺霜刀百鍊磨 揮之漫舞拂之歌 飛光一擊紅撩亂 滿目江山落葉多

第四十五回來賓學生撰手競走。

白 石川縣尋常師範學校撰手

赤 石川縣尋常中學校撰手

青 石川縣工業學校撰手

紫 私立北陸學校撰手

開會前日に既に各校より撰手の姓名をは通知し來りぬ。思ふにこれ各校が擇ひに擇ひし運動家な

らん歟。回顧すれば去歳の事なりけり。師範學校の勢は破竹の如く遂にメダルを握り、尋中これにつき北校更にこれにつゞきぬ。前回の形勢すでにかくの如くなれば、今回の競争に於ては大に前辱を雪がんとつとむる者もある可く、なほメダルを再び握らんと計る者もある可し。而も勝敗は此一舉に在るなり。一舉一舉これまきに各校運命の定まる所。あゝ何れかよくメダルを握るべきや。二等三等を制すべきや。白衣を着するものは師範校に非ずや。赤服を被ふ者は尋中に非ずや。然らば則ち青色なるは工業校なる歟紫色なるは北陸校なる歟。一校三人合して十二人。各色參差相混して立つ。此時各校の生徒は總立となり帽をふりハンタチを翻して頻りに其校名をよび、其服色を叫ぶ

饑鷹寒鷗は驚沙坐飛す。僵るゝものは青なる歟、擢でし者は赤なるか。一週に於ては赤真先に進み赤、紫これに従ふて奔る。白は前年に比しては其脚頗濫きを覺え、紫例によりて頗る後方に遂巡す。而も今なほ一週を餘す。勝敗の機未だ俄かに斷ずべからざる也。あゝ二週。二週途半にして紫は紫電の如し。直ちに迫つて二赤を抜き、六間の大差を以て遂に萬々歳たり。二等と三等共に胸上げに餘念なく、歡呼々々人を襲せしめむば止まず。請ふ其勝者の姓名と校名とを並せ掲げむ

メダル(紫)一分十五秒 私立北陸學校撰手 黒坂外美雄

二等 (赤)

石川縣尋常中學校撰手 長谷川鐵次郎 三等(赤)同上 三橋 篤敬

第四十六回柿拾競走。

第四十七回同上。

第四十八回盲目旗拾。まかり出たる者は盲目冠者で御座る。と十餘人はずらりと一列に並び、腕を扼し脚を撫して遙かに前方を見つむれども、憐れ其目は盲なるを知らずや。奔ると未だ十間に至らず、早や手を舉げて旗を尋ねんとするは何等の痴事ぞや。急奔勇走旗を壓し倒して進むは何等の輕躁ぞや。中にもいと可笑しかりしは誰なりけむ。旗を負ふて方向を失し、東西南北足の向ふ所に走りけるうち、無我無心に鶯の翔るを眺め居たりし某生につき當り、頭顛倒と打倒し乍ら、なほも迂路つく様なりけり。唯夫れ佐藤家太氏に至ては、大手を廣げて初めより突進し、直ちに旗を持して歸へりぬ

一等(白赤)二十秒 佐藤 家太 二等(白) 柿原 龍彦 三等(淡紅) 紅林 豊治

四等(黄) 住田寅二郎 五等(黒) 島村他三郎

第四十九回障害物競走。嗚呼これ無上の好敵手也。淡紅なるは紅林氏に非ずや、又かの黄なるは安藤氏に非ずや。共に進み共に競ふ。相並びて而して更に一步を差へず。遂に進んで最後の障害物に至る。此時斷棚既に崩れたり。即ち淡紅はこれを踏えて進み、黄は身を低ふして其下を過ぐ。あゝ準備係が豫め注意を與へざりし爲め。事の齟齬する斯くの如きに至る。即ちメダルは兩氏の相談を待ちて、之に與ふるとに決しぬ

第五十回戴囊撰手競走。又々撰手の競走を見る。蓋し第三十五回に於て決するを得ざりしが故而已。三好氏善く走る。走ると雖もメダルを見るに至らざりしは如何。あはれ限りなきの恨みは決勝

點を距つる一間、墜囊の上には宿るらん

メダル四十秒 中山 清三

第五十一回來賓職員戴囊撰手競走。來賓職員の戴囊撰手競走か。これも妙也。飯森氏は來賓にして松田氏は職員なり。さらは則ち來賓と職員との競走か。更に妙也。飯森氏はまたこれ舊學生なれば。學生と職員との競走とも見んか。無髯有髯の競走とも云はんか。憐れむ先生が中途にして戴囊を失せるを。あゝ競技場裡飯森氏が獨り大地を蹴つて飛ぶを見る而已

メダル四十二秒 飯森亥三郎

第五十二回 各級撰手競走(四町)

待ちに待ちたる各級撰手競走は來りぬ。請ふこゝに撰手の姓名を紹介せん

白	大學豫科三年撰手	五十嵐嘉一	同	石田 莊二
赤	大學豫科二年撰手	佐藤龜久次	同	田中正太郎
青	大學豫科一年撰手	安藤 豊	同	山口 重作
紫	醫、藥學部撰手	小西虎次郎	同	谷口 長松
紫	同	橋本喜久三	同	西野監次郎
黄	豫 備 撰 手	田宮 春策	同	秦 又四郎

なほこれに添ふるに諸氏の履歴を以てせむか

(二十競走  
第二等)

五十嵐嘉一



(四十競走 第二等)	二人三脚	六町競走 第一等	メダル
(二人三脚 第一等)	メダル	六町競走 第二等	メダル
(二町競走 第一等)	メダル	第一等物	
(二町競走 第二等)	第一等飛		
(二町競走 第一等)	第一等飛		

石田 莊二

佐藤龜久次

田中正太郎

安藤 豊

山口 重作

小西虎次郎

谷口 長松

橋本喜久三

西野監次郎

田宮 春策

秦 又四郎

(二町競走 第二等) 二人三脚 第一等

梅田 福二

更に一事の記憶するを要する者あり。そは前年の各組撰手競走に於て、榮譽なるメダルを制したるは舊豫備二年今の豫科一年(柳田友麿)なり、第二等を握りしは舊豫科一年今の豫科二年の撰手(佐藤龜久次)なり。而も三着にありしは舊二年今三年の撰手(石田莊二)なりしが、當時其實は僅かに二等までに限られたれば、彼は一間の差に無限の遺恨を抱き、快々として退きたるこの成功の跡敗潰の運は、今年の運動會即ち今回の勝敗に、幾何なる關係を有するかに在り。あゝ誰かよくメダルを得何れの級か果して其榮名を擔ふ可きや。而も運命はこの一擧にかゝれる也

撰手整然として相並ぶ、正に是

一畝は黃菊白菊ばかりなり 秋 竹

銃聲一發、撰手走る。宛然機の駭くが如くにまた蓋の過ぐるに似たり。赤紫黃青相前後し白は獨り後れて進む。此時衆生宛然狂せるが如く各其色を叫び、柵の周圍に添ふて走る。來賓席も總立となり小學生も總立となる。否々萬衆悉く總立となり。各持する所の旗色を呼ぶ。あゝ一週、今や二週この幾秒の間こそ各級の運命の定まる所。撰手皆は大責任を負ふ者。よし一身を犠牲にして此一回に供せむと。其狀態走るといふは當らざる也。飛ぶといふも未だ盡さず。唯夫れ風馳電逝。影躡ふるに道なく姿追ふによしなし。最後れたる一白この時韋駄天の如く。抜き抜き抜ては遂に第三着となる。知らず一着二着は果して誰れの占むる所となりしを

- メダル(青)一分十秒 大學豫科一年撰手 山口 重作
- 二等(赤) 大學豫科二年撰手 佐藤龜久次
- 三等(白) 大學豫科三年撰手 石田 莊二

豫科一年萬歳青萬歳の聲は隅より隅迄轟きぬ。限りなきの榮譽は山口氏の胸間に輝きぬ。あゝ此勝者に對して、希臘の昔しならざるも、焉んぞ一詩の以てこれを頌すべきものなしとせんや

競技超倫衆目推 功成不伐意悠哉 心懸一點銀牌賜 比得金鷄燦々來 熱 童

其跡や其運や毫も前會と異なるものなき所以。深く奇とするに足らん歟

五十餘回の競技これを以て終となす。嗚呼盛大なる運動會は終始愉快を以て満されたり。來賓縱覽者は歸途文二年生の福引や菓子などに、定めて夥しき家づとを持ち去りしならむも、記者既に疲れ果て、唯三盃の酒を傾くるに急にして餘事を顧に懶なり。希くは相携へて祝宴會にうつらん哉

日は落ちて千山萬山暗らく、月は出でず星斗僅かに光を漏らすの下。會員六百圓陣を作りてこゝに祝宴を開く。あゝ暗中の宴また一興に非ずや。大島校長先づ立つて恭しく 陛下の萬歳を三唱し奉り、會員白を捧げてこれに和すると三度。即ち坐しては食ひ仆れては飲む。あゝ青天に霹靂を動かし、大地に波濤を起したる運動場裡。今はたゞ歡談の一場とはなりぬ。所々に散在せる勇士は胸間にメダルを輝かし。頻りに太白を傾けて當時の快戦を談ず、勇士勇士余れ爾を愛す。只箇の一點無明の焰、鍊出せしか我校の大勇士を。焰々たる其光上ると幾萬丈。漸くにしては六百彈子を鑄鍊すべきか。あゝこの鍊彈子他日我邦の爲めに抑も如何の邊に向てか飛ばむ

技盡高歌氣更剛

身應日省體應疆

胡澹菴談從子維寧書中曰  
身欲其日省餘欲其日疆

秋來髀肉今如此

綠酒何盃灑結腸

一著只應入本源

磨揉遷善道偏存

爲期緩急奉公日

忠勇最多出此門

熱 童



## 投 書 心 得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は徳義に背くものは一切掲載致さるべし

全 明治二十八年十二月廿五日印刷  
年十二月三十日發行

編輯兼發行者

中 川 忠 順

印 刷 者

中 村 孝

發 行 所

第四高等學校北辰會

印 刷 所

株式會社 英 秀 舍

金澤市廣坂通第四高等學校時習寮  
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

(明治廿八年二月廿七日内務省許可)